浜松における中世城館の調査

－浜松城跡11次（引馬城）・伝松下屋敷２次－

浜松市教育委員会

2016年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education,March 2016

例　言

1　本書は浜松市中区元城町の浜松城跡と浜松市南区頭陀寺町の伝松下屋敷で実施した発掘調査（確認調査）にかかわる報告である。

2　浜松城跡では過去に10度の発掘調査を実施している。本発掘調査を11次調査とする。また、伝松下屋敷では過去に１度、発掘調査を実施している。本発掘調査を２次調査とする。

3　引馬の表記については、引間、引駒、曳馬、曳駒、匹馬などの表記がみられる。本書では「引馬」を用いる。

4　これらの発掘調査は、いずれも「徳川家康公顕彰400年記念事業」の事業として、浜松市（主管：2015年６月まで企画調整部広聴広報課、2015年７月以降は産業部観光・シティプロモーション課）の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。

5　いずれの発掘調査も和田達也（浜松市文化財課）が担当し、浜松城跡11次調査は、熊谷洋子・武田裕美・坪井里恵（浜松市文化財課）が、伝松下屋敷2次調査は、熊谷・小杉直孝（浜松市文化財課）が補佐した。

6　いずれの整理作業も和田が担当し、熊谷・水島絵理（浜松市文化財課）が補助した。本書の執筆及び編集、写真撮影は和田が行った。

7　本書で用いる方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

8　本書で報告する土器の断面と種別は以下の通りである。

□土師器・土師質土器　■須恵器　■中世陶器・陶器　■貿易陶磁器

9　調査にかかわる諸記録および出土遺物は浜松市文化財課が保管している。

10　本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

（財）浜松市文化振興財団→浜文振

教育委員会→教委

11　本書の作成にあたり、藤澤良祐氏（愛知学院大学）からご教示をいただいた。

目　次

例言

第１章　序　　論 …… 1
第２章　浜松城跡11次調査の成果 …… 3
第３章　伝松下屋敷２次調査の成果 ……15
第４章　総　　括 ……22

図版

第１章　序　論

１　調査にいたる経緯と経過

2015 年、徳川家康が死去し、400 年の節目を迎えた。家康とかかわりの深い地域では足跡を再顕彰する機運が高まりをみせ、徳川家康公顕彰 400 年記念事業と銘打った様々な催しが企画・開催された。浜松市文化財課では、2014 年と 2015 年に徳川家康とその時代に関わりがある中世城館遺跡の発掘調査を実施した。

浜松城跡 11 次　浜松城跡 11 次調査は、浜松城の前身である引馬城があったとされる元城町東照宮境内で実施した。家康により浜松城が整備されるまでの間、拠点であったと想定される引馬城の北西部の曲輪を対象として発掘調査を行った。元城町東照宮の境内では、かつて社殿建設工事に伴い、戦国時代の陶器やかわらけが出土している。また、境内の北西部には、地形の高まりが確認でき、土塁の可能性が指摘されてきた。遺跡の遺存状況の確認を目的として発掘調査を実施した。現地調査は、2014 年 8 月 5 日～ 22 日に実施した。調査面積は 17 ㎡である。

伝松下屋敷２次　伝松下屋敷は、今川氏や徳川氏に仕えた松下氏が居館を構えたと伝わる 100 m 四方ほどの屋敷地で、頭陀寺城の一部であったとも想定されている。２次調査は、伝松下屋敷の北西部にあたる現在の頭陀寺第一公園の北東部において実施した。頭陀寺第一公園の北西部には伝松下屋敷の土塁と想定される小高い地形がみられる。現地調査は、この地形の高まり部分に調査区を設定し、2015 年 9 月 7 日～ 18 日に実施した。調査面積は 10 ㎡である。

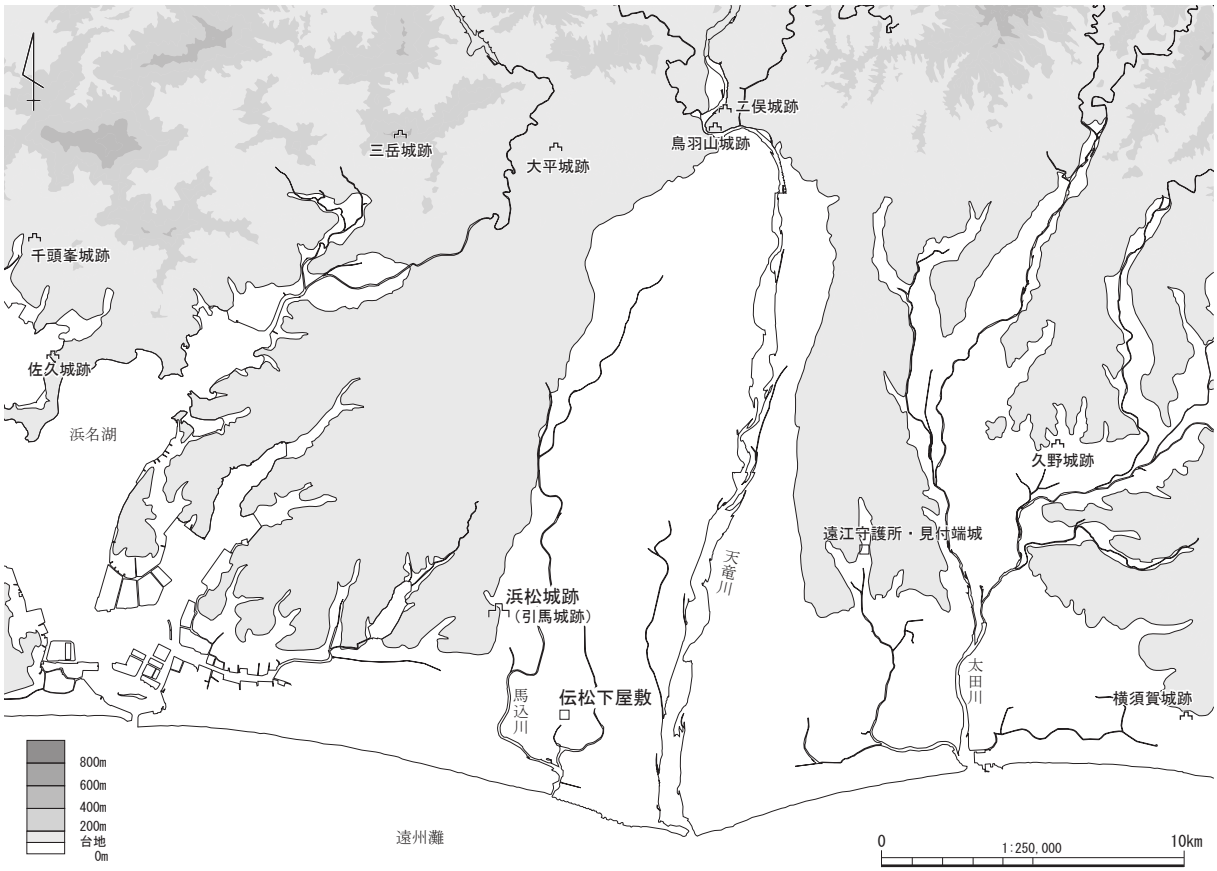


Fig.1　浜松城跡と松下屋敷跡の位置

２　浜松市内の主要な中世城館と歴史的背景

『静岡県の中世城館跡』（静岡県教委 1981）によると、浜松市内に約 100 箇所の城跡や居館跡が存在している。文献史料などにおいて浜松市域で城館の存在が確認できるのは、南北朝時代からである。西遠江を拠点のひとつとした南朝勢力の城として記録がみられるが、城館の数は限られている。浜松市域において城館の数が増加するのは、戦国時代に入ってからのことである。以下、浜松城跡や伝松下屋敷が所在する浜松市南部の城館を中心として、様相がある程度うかがえる南北朝時代と戦国時代、近世に分けてまとめる。

南北朝時代　文献史料における浜松市内の城館の初見は南北朝時代に遡る。井伊城（三嶽城）、天山城（田沢城）、千頭峯城、大平城、鴨江城、二俣城（現在の笹岡城跡）が挙げられる。南北朝時代に構築された城のいくつかは、中世寺院の存在が想定される場所に構築されている。中世寺院が軍事的な拠点施設として使用されたと言える。また、これらの城跡の多くは、天然の要害を活かした山城である。戦国時代に大規模な改修が施されたものが多く、当時の様子は不明瞭である。

戦国時代　現在の浜松市を含むの遠江国は、今川範国が守護職に任命されてから、今川氏の支配下に置かれたが、応永 10 年（1403）からは今川氏に代わり、斯波氏が守護職を勤めた。応仁元年（1467）の応仁・文明の乱に端を発し、遠江国では、遠江国守護で東軍に加勢した斯波義廉と、遠江奪還を目指し西軍に加勢した今川義忠が対立した。また、明応２年（1493）の明応の政変後、明応３年（1494）には、斯波義寛と今川氏親がそれぞれ遠江国守護に任じられ、引馬城を中心に領有権争いが継続した。この対立は、井伊氏・大河内氏・浜名氏を中心とした遠江の国人領主に加え、上級支配者層である今川氏・吉良氏・斯波氏と主従関係にあった三河国や駿河国の国人領主を巻き込み、不安定な地域情勢を生み出した。引馬城では、文亀元年（1501）に斯波氏のもとに二俣氏、小笠原氏、村櫛氏、堀江氏が、永正８年（1511）には斯波氏のもとに大河内氏が、永正 11 年（1514）には斯波氏・巨海氏・大河内氏が今川氏と引馬城をめぐり戦った。この争いは、今川氏親が対抗勢力を治め、駿河国・遠江国を治める守護大名になる永正 14 年（1517）まで続いた。

永禄３年（1560）の桶狭間の戦いに今川義元が敗れたことを契機として、国人領主の離反や反乱が多く発生し、今川氏真が「遠州忿劇」と表現する不安定な状況になった。永禄 11 年（1568）に遠江進出を果たした徳川家康が、三河国から遠江国へ拠点を移した元亀元年（1570）に引馬城を拡張し、浜松城と改名・入城した。徳川家康の遠江領有以降、武田氏が遠江進出を開始した元亀３年（1572）から、長篠の戦いを契機に武田氏勢力が衰退する天正３年（1582）までの間、遠江国内では緊張状態が続き、城郭や砦の整備が盛んに行われている。

浜松市内の拠点的な城跡は、今川氏親の遠江平定から武田氏と徳川氏による争奪戦の期間を中心とした時期に軍事的な施設を備えた城として整備されたといえる。

近　世　小田原の陣の後、徳川家康の関東移封に伴い、徳川氏がかつて領有した東海道沿いには、豊臣氏恩顧の大名が配置された。各地域の拠点的な城郭は、瓦葺建物や大規模な石垣を備えた織豊系城郭へと改修が行われた。

浜松市域では、堀尾氏のもと、地域の拠点である浜松城・二俣城・鳥羽山城は瓦葺建物や大規模な石垣を有する織豊系城郭へと整備が進められた。関ヶ原の戦いの後、堀尾氏は出雲へ移封され、東海道沿いの拠点的な地域には徳川譜代の大名が配置された。慶長 15 年（1615）の一国一城令に伴い、浜松藩の城は、浜松城を残して廃城になった。

第２章　浜松城跡 11 次調査の成果

１　浜松城跡・引馬城跡をめぐる環境

（１）地理的環境

浜松城跡は、東に天竜川平野を臨む三方原台地の東縁部の河岸段丘を利用して構築された平山城である。浜松城は最高所に天守曲輪をもち、東側の平野へ向かって本丸、二の丸、三の丸を配置する。浜松城の規模は近世に最大を迎えており、東西 600 m、南北 700 mの規模であった。浜松城は、北と南を谷、東を低湿地に囲まれた要害の地に構築されている。西から北西方向には、三方原台地と連続した平坦面が続いており、作左曲輪や西端城曲輪などの曲輪が配置されている。

浜松城跡 11 次調査対象地は、現在の浜松市中区元城町に所在する元城町東照宮の境内にあたる(Fig.2･3 古城部分)。浜松城跡が所在する三方原台地の東縁から北東へと張り出した低丘陵の東端部に位置し、北・東には低湿地が展開し、後の浜松城が構築される東側に段丘との間には浅い谷状の地形がみられる。

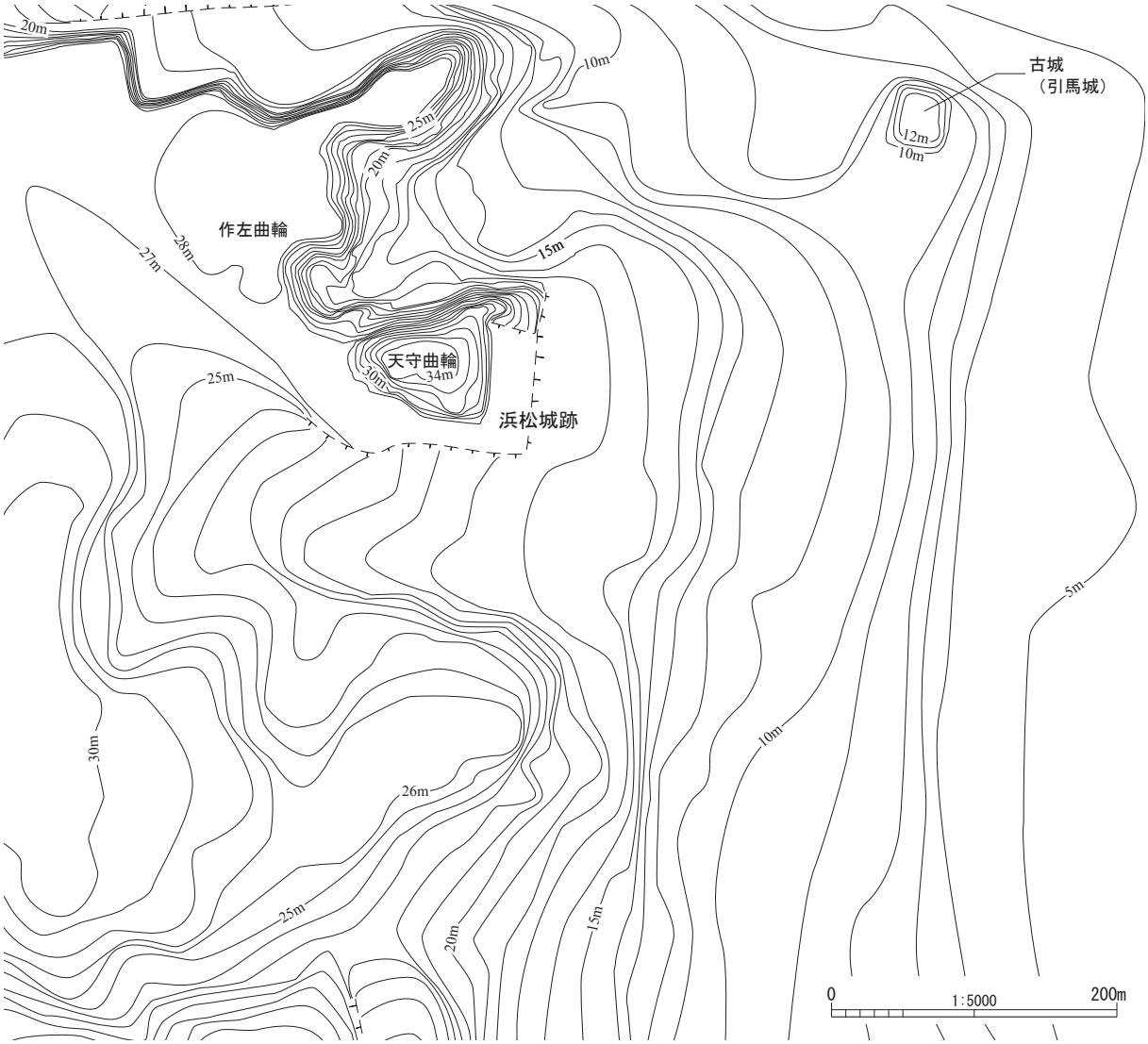


Fig.2　浜松城跡とその周辺の地形

（2）歴史的環境

原始・古代　浜松城跡とその周辺において原始から古代にかけての集落は確認できないが、浜松城跡とその周辺で実施した発掘調査や工事立会によって、古墳時代から古代の須恵器が複数点出土している。また、天守曲輪の北西部にある作左山では、横穴墓が確認されているほか、三方原台地東縁部には多くの古墳が築造されており、浜松城跡とその周辺も古墳時代には墓域として利用されていた可能性がある。

中　世　浜松城跡の北東部には東海道と天竜川の分流（小天竜：現在の馬込川）の結節点を東端とし、西側へと引馬宿が発達したことが知られ、旧引馬宿推定地（以降、引馬宿と表記）として埋蔵文化財包蔵地に登録されている。引馬宿の範囲は、現在の浜松市中区早馬町から中区八幡町の一帯にあたる。引馬宿の形成は鎌倉時代に遡り、室町時代（文明 17 年：1485）に著わされた『梅花無尽蔵』には、「引馬、市は富み、屋は千区」とあり、街道を代表する都市のひとつであったと捉えられている。また、地籍図の分析から北東方向から南西方向へ向けて伸びる近世城下町とは独立した都市的な区画が認められ、引馬宿の中心地とされる（太田 1996）。この区画の北端には浜松八幡宮があり、都市景観の起点であった可能性が指摘されている（鈴木 2013）。

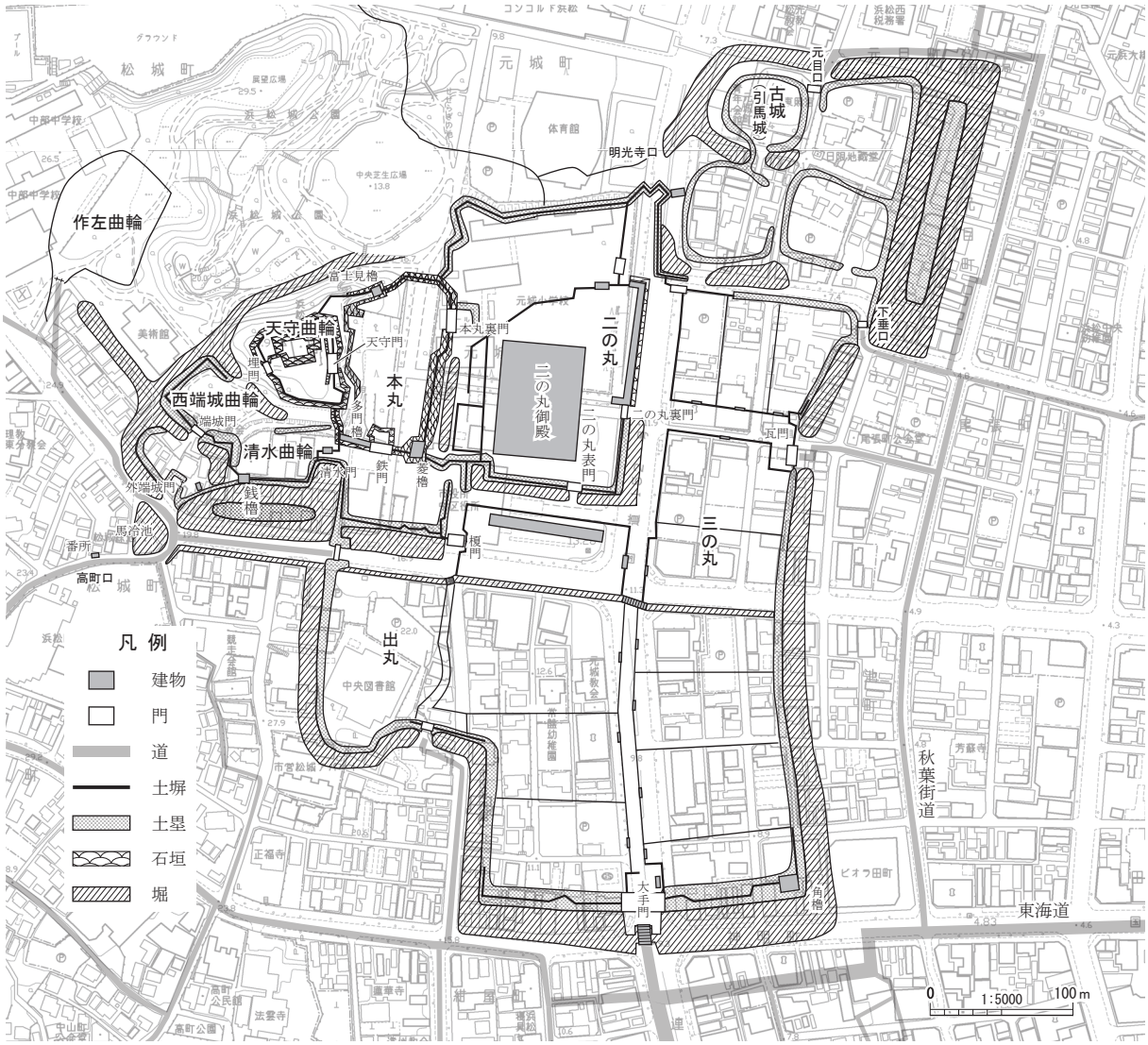


Fig.3　浜松城跡の構造復元図

浜松城の前身の城と評価される引馬城は、引馬宿の南西部に位置する。引馬城の築城時期は不明であるが、今川氏の遠江国領有期には家臣の飯尾氏が引馬城に入り、整備を進めたとみられる。その後、徳川家康が遠江へ進出し、引馬城を西へ拡張し、浜松城を整備するまで中心的な城として利用された。引馬城の範囲は、近世浜松城における古城と記された部分の一角にあたり、東西 120 m、南北 150 mほどの方形の敷地を、堀などで４分割した構造である。引馬城の北側や北東部には「椿屋敷」や「蛇屋敷」といった区画がみられ、引馬城段階の屋敷地があったと想定できる。

浜松城の整備は、徳川家康が引馬城に入城し、城域を西側の台地上へと拡張したことに契機が求められている。松平家忠が著した『家忠日記』からは、天正 6 年（1578）には「新城普請」とあり、浜松城において大規模な城普請が行われたことがうかがえる。この時期の城普請で作左曲輪まで浜松城の範囲が拡張・整備されたと捉えられる。その後、天正 18 年（1590 年）の関東へ移封されるまでの間、徳川氏の拠点のひとつとして使用された。家臣団の屋敷地は、浜松城の周囲を取り囲むように三方原台地上や東海道をはじめとした主要な交通路沿いに配置されている。また、天正年間に寺社が移転したとの記事が多く見受けられる。『遠江風土記伝』によると、五社神社が二の丸から利町へ、松尾神社が塩市口から本魚町へ、神明社が旧城内の南面から高町へと移動したことが知られている。社伝・寺伝によると金山神社が城内三の丸から栄町へ、法雲寺が城内から旭町へ移動したことがわかる。徳川家康が拡張した浜松城の範囲にあたる寺社が移動しており、移転先が当時の城下町の範囲を示している可能性が指摘されている（鈴木 2014）。

近　世　徳川家康が関東へ移転すると、豊臣系の大名が東海道沿いに配置される。浜松城には、堀尾吉晴が入り、高石垣や瓦葺建物、天守が構築されたとみられる（加藤 1994）。浜松城において石垣が構築されているのは、天守曲輪と本丸・その周辺に限られる。後世に積み直しが行われた部分も少なくない。天守台の石垣は、矩方のみという古式な部分もあるが、天正期の石垣に比べ算木積みが発達しており、文禄年間前後に成立したと捉えられる（北垣 1987）。また、天守曲輪から出土した瓦の中には、織豊期の特徴を持つ瓦が多く認められ、堀尾氏在城期に瓦葺建物が整備されたことがうかがえる。堀尾氏による浜松城の改変は、天守曲輪と本丸とその周辺に集中しており、織豊城郭化の範囲を反映しているとみられる。引馬城跡は堀尾氏在城期に使用や改変された様子が認められず、詳細は定かでない。堀尾氏領有期の城下町の様子は明らかでないが、天守の位置や浜松城の構造からは、旧来の宿町である引馬宿を意識していたとみられる。関ヶ原の戦い後、堀尾氏が出雲へ移転し、東海道沿いには再び徳川譜代の大名が配置され、9 家 22 代の城主を数え近代を迎える。浜松城は織豊系城郭から城下町と一体となった近世城郭へと改変が進められた。主な変更点は、浜松城三の丸の拡張、東海道の移設、引馬宿の解体と新しい町屋の形成が挙げられている（太田 1996）。

近・現代　明治 6 年（1873）に廃城令が発布されると、城を構成した建物や土地の払下げが行われ、天守曲輪・本丸以外の曲輪は、大規模な地形改変を受けた。明治 19 年（1886）には古城の地に東照宮が建立され、戦災で焼失後、昭和 35 年（1960）に現在の社殿が再建された。昭和 25 年（1950）には、市制 40 周年記念事業として実施された「浜松こども博覧会」を契機として浜松城公園が開園し、競技用プールや動物園や遊具などが設置された。昭和 26 年（1951）には、天守曲輪と本丸一帯が市指定文化財として保護されることとなった。昭和 33 年（1958）、天守台の上に鉄筋コンクリート造りの復興天守が建築された。その後、動物園等は閉園・撤去され、広場や駐車場などに再整備された。平成 21 年（2009）に浜松城公園歴史ゾーン基本構想、平成 23 年（2011）に基本計画が策定され、平成 26 年（2014）には天守門が復元などの再整備が進められている。

Tab.1　浜松城跡に関わる略年表

年代（西暦）	支配者（城主）	できごと	
	斯波（大河内）	斯波氏を今川氏の中心に引馬城の争奪戦が展開される。	
永正 14 年（1517）		今川氏親、遠江平定（1517）	
	今川（飯尾）	桶狭間の戦い（1560） 遠州忿劇（1562） 今川氏真、引馬城を攻める（1564）	
		徳川家康、遠江進出（1568）	
元亀元年（1570）		徳川家康、浜松城入城	
	徳川	三方原の戦い（1572）	浜松城へ改称 浜松城本丸・天守曲輪、作左曲輪等の新城普請（詳細不明）
		長篠の戦い（1575）	
		徳川家康、駿府城へ拠点を移し、菅沼定政が城代として浜松城に入る（1586）	
天正 18 年（1590）		小田原の陣　徳川家康関東へ移封、堀尾吉晴・浜松城入城	
	豊臣（堀尾）		瓦葺建物（天守門等）建築、石垣の構築
慶長５年（1600）		関ヶ原の戦い　堀尾氏、出雲へ移封 徳川家康、江戸幕府を開く（1603） 大阪夏の陣、豊臣氏滅亡　一国一城令（1610）	
	徳川（譜代）		譜代の城として整備が進む
明治元年（1868）		明治維新 廃城令（1873） 二の丸・三の丸民間払い下げ（1875）	
明治 19 年（1886）		元城町東照宮建立	
昭和 20 年（1945）		浜松大空襲	
昭和 25 年（1950）		浜松城公園開設	
昭和 33 年（1958）		浜松城復興天守建設	
昭和 34 年（1959）		天守曲輪・本丸とその周辺を市指定史跡にする	
昭和 35 年（1960）		元城町東照宮再建	
平成 21 年（2009）		浜松城公園歴史ゾーン整備基本構想策定	
平成 26 年（2014）		浜松城天守門復元	
平成 27 年（2015）		徳川家康公顕彰 400 年記念事業	

２　浜松城跡の調査履歴

概　要　浜松城跡では 2016 年 3 月までに、18 回の発掘調査と度重なる工事立会等が行われてきた。発掘調査の多くは浜松城公園内で行われたものである。これらの発掘調査により、天守曲輪や天守門、作左曲輪、清水曲輪、西端城曲輪など主要な曲輪における遺構・遺物の残存状況や構造の変遷が明らかにされてきた。これらの調査地点を Fig.4 に、調査成果を Tab.2 にまとめた。以下、11 次調査を実施した元城町東照宮境内の調査履歴について紹介する。

元城町東照宮境内における調査　現在の元城町東照宮境内における発掘調査は、11 次調査が初めてである。Fig.4- 地点 D では昭和 35 年（1960）に現在の元城町東照宮社殿建設工事の際にかわらけや陶器が発見･採集されている。これらの出土遺物は、出土地点などの詳細な情報は不明だが、遺物の時期は 15 世紀後半から 16 世紀前半のものと捉えられる。近世浜松城を描いた絵図の「古城」と記された部分に、浜松城よりも古い時期の城跡があった可能性を示す重要な成果である。

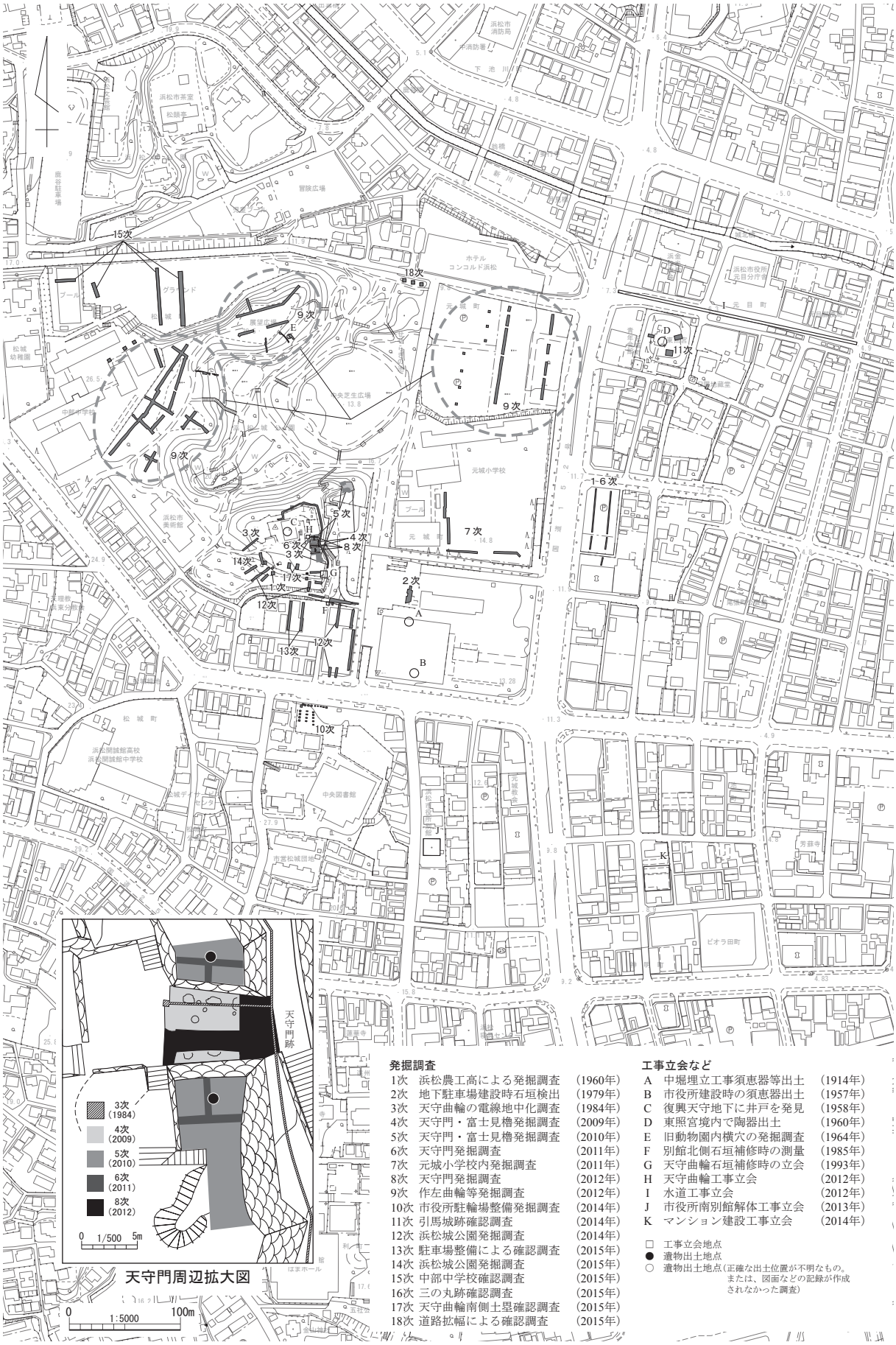


Fig.4　浜松城跡における発掘調査等実施位置図

Tab.2　浜松城跡の調査履歴

発掘調査

名称	年次	調査事由	成果等	文献
1次	1960年	浜松農工高による確認調査		
2次	1979年	市役所地下駐車場整備	工事時に石垣が発見　測量等を実施	浜松市教委1996
3次	1984年	電線地中化工事	天守曲輪とその周辺を調査　未知の石垣等を確認	浜松市教委1984・1996
4次	2009年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓を調査　礎石等を検出	浜文振2010
5次	2010年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓を調査　天守門櫓部で根石列等を検出	浜文振2011
6次	2011年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門を調査 櫓台石垣の裏込石等を確認	浜文振2012a
7次	2011年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二の丸を調査で井戸等を確認	浜文振2012b
8次	2012年	天守門復元工事	天守門に付随する瓦積み排水設備の全体像を確認	浜松市教委2013a
9次	2012年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作左曲輪等を調査　柱穴等を検出	浜松市教委2013b
10次	2014年	市役所駐輪場整備	溝等を確認	浜松市教委2015b
11次	2014年	遺構残存状況把握のための確認調査	古城部分を調査　土塁等を検出、かわらけが多数出土	浜松市教委2016b
12次	2014年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側の石垣・天守曲輪南側の空堀・戦国期以前の大型溝等を検出	浜松市教委2015b
13次	2015年	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12次調査検出の大型溝と同一の可能性がある大型溝を確認	浜松市教委2016
14次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側の石垣・西端城曲輪等の空堀・本丸西側の土塁と登塀を確認	浜松市教委2016
15次	2015年	中部中学校確認調査	浜松城に関する遺構は確認できず	浜松市教委2016
16次	2015年	三の丸跡確認調査	三の丸に関わる遺構は未確認。戦国期以前の遺構・遺物を確認	2017年以降報告予定
17次	2015年	天守曲輪南側土塁確認調査	天守曲輪南側土塁・土塁内側石垣基底部・曲輪内整地面の状況を確認	2017年以降報告予定
18次	2015年	道路拡幅による確認調査	浜松城に関わる遺構は確認できず	2017年以降報告予定

工事立会など（主要なもの）

記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914年	中堀埋立工事	須恵器出土	静岡県1930
B	1957年	市役所庁舎建設	須恵器出土	浜松市教委1996
C	1958年	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委1996
D	1960年	元城町東照宮社殿建設	境内より陶器等が出土	浜松市教委1996
E	1964年	動物園内施設整備	作左山横穴を確認	向坂1976
F	1985年	駐車場擁壁工事	本丸南側石垣を確認	浜松市教委1996
G	1993年	天守曲輪石垣補修	天守台の盛土や裏込の状況等を確認	浜松市教委1996
H	2012年	天守曲輪蜜柑改植	瓦が出土	浜松市教委2013c
I	2012年	水道工事	古城（引馬城）北側の堀を確認	浜松市教委2014
J	2013年	市役所南別館解体工事	出丸から三の丸にかけての堀を確認	浜松市教委2015
K	2014年	マンション建設	三の丸東側の堀を確認	2016年報告予定

参考文献

静岡県　1930『静岡県史』第1巻（旧版）
向坂鋼二　1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10
浜松市教育委員会　1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
浜松市教育委員会　1996『浜松市指定文化財 浜松城跡 －考古学的調査の記録－』
㈶浜松市文化振興財団　2010『浜松城跡4次』
㈶浜松市文化振興財団　2011『浜松城跡5次』
㈶浜松市文化振興財団　2012a『浜松城跡6次』
㈶浜松市文化振興財団　2012b『浜松城跡7次』
浜松市教育委員会　2013a『浜松城跡8次』
浜松市教育委員会　2013b『浜松城跡9次』
浜松市教育委員会　2013c『平成23年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2014『平成24年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015a『平成25年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015b『浜松城跡10』
浜松市教育委員会　2016『浜松城跡11』

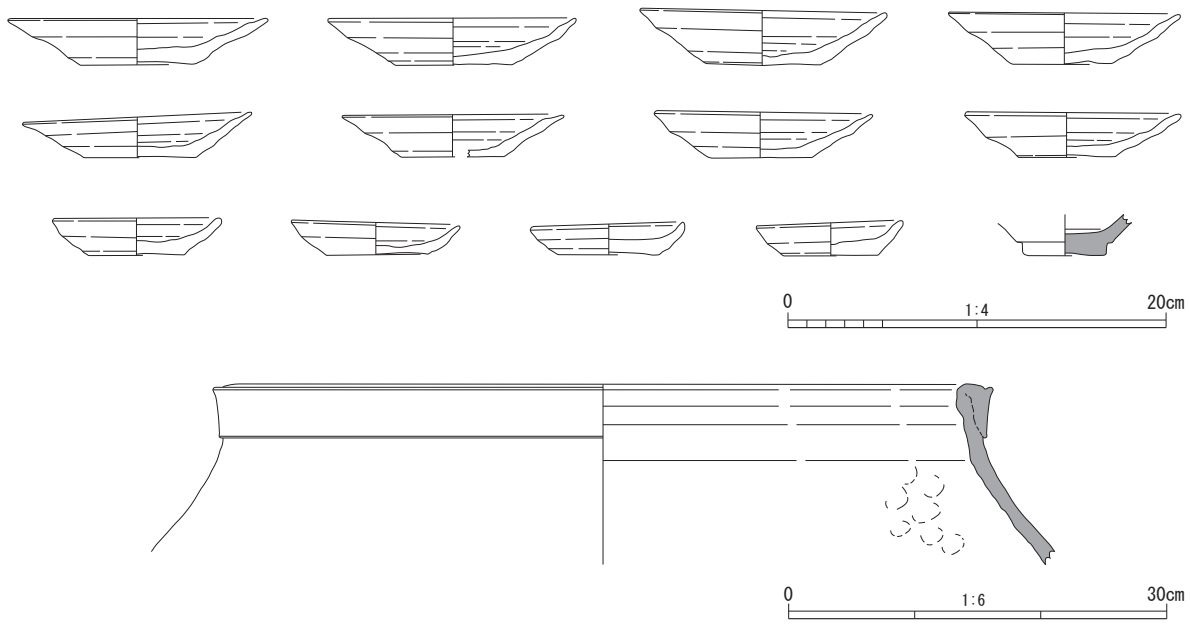


Fig.5　D 地点出土遺物実測図（太田 1996 よりトレース、一部改変）

3　調査の方法と経過

現地調査　現地調査は、2014 年 8 月 5 日～ 22 日にかけて実施した。元城町東照宮境内に 3 つの調査区を設定し、平坦面に構築された遺構の有無や、土塁の残存状況の確認を行った。この結果、平坦面には良好な状態で小穴や土器集積などの遺構や遺物が残存していることが明らかになった。また、北東部に設けた調査区では、良好な状態で土塁が残存していることが明らかになった。写真撮影や図面類の記録を作成したのち、流用土を用いて旧状に復旧し、調査を終了した。

現地説明会等　現地調査の成果が揃った 2014 年 8 月 17 日に現地説明会を開催した。徳川家康公没後 400 年の節目を迎えることもあり、市民を中心に 350 人が参加した。

整理作業　浜松城跡 11 次調査の整理作業は、調査終了後から断続的に実施した。整理作業は、2014 年度から 2016 年度にかけて、浜松市埋蔵文化財調査事務所（浜松市北区引佐町井伊谷）において実施した。

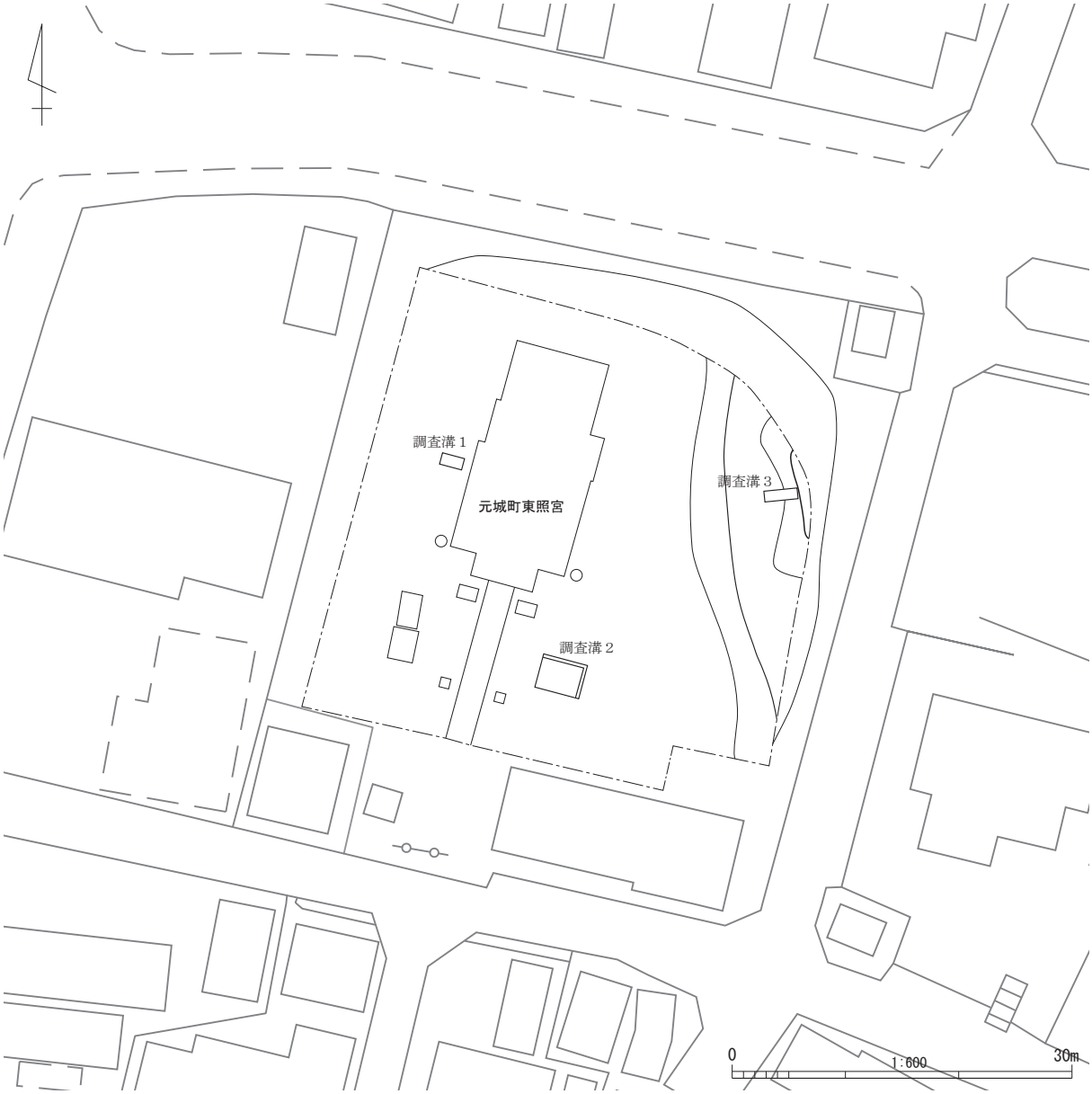


Fig.6　調査区配置図

4　調査成果

（1）調査成果の概要

浜松城跡 11 次調査では、引馬城が所在したと推定される元城町東照宮境内において 3 箇所の調査区を配置し、遺構や遺物の埋没状況について確認を行った。元城町東照宮境内には南北約 40 m、東西約 35 mの平坦面があり、北東隅から東側にかけて土塁状の小高い地形がみられる。発掘調査の結果、小穴や窪地状遺構、土塁が良好な状態で残存していることが明らかになった。また、戦国時代を中心とした時期の遺物が多く埋没していることが明らかになった。

（2）調査溝 1 の遺構と遺物

調査溝 1 は、元城町東照宮の社殿西側に配置した調査区である。1960 年の工事立会時に、かわらけや陶器が豊富に出土しており、遺跡が関わる情報が埋没している可能性が高い社殿に近い部分で遺跡の残存状態の確認を試みた。

遺　構　明確な遺構は確認できなかったが、黄褐色砂礫土の基盤層（13 層）やかわらけを豊富に含む包含層（11 層）を確認できた。12 層は褐色砂礫土であるが、自然堆積土とは捉えがたい。調査溝 1 の西側が削平されているため明言は困難であるが、土塁の裾部の可能性がある。

出土遺物　調査溝 1 からはかわらけや貿易陶磁器が出土した。このうち、1 ～ 7 の 7 点を図示した。1 ～ 6 はかわらけで、1･2 は上位層、3 ～ 6 は包含層出土である。1 は口径 10.0cm、2 は定形 8.0cm、3 は口径 13.7cm、4 は 13.0cm、5 は口径 12.2cm･高さ 2.2cm･底径 6.3cm、6 は口径 9.2cm･高さ 1.6cm、底径 5.5cm である。7 は中国産の染付皿で、口径 12.0cm・高さ 3.1cm・高台径 7.1cm である。染付皿 E 類（小野 1982）と捉えられ、16 世紀後半のものと捉えられる。

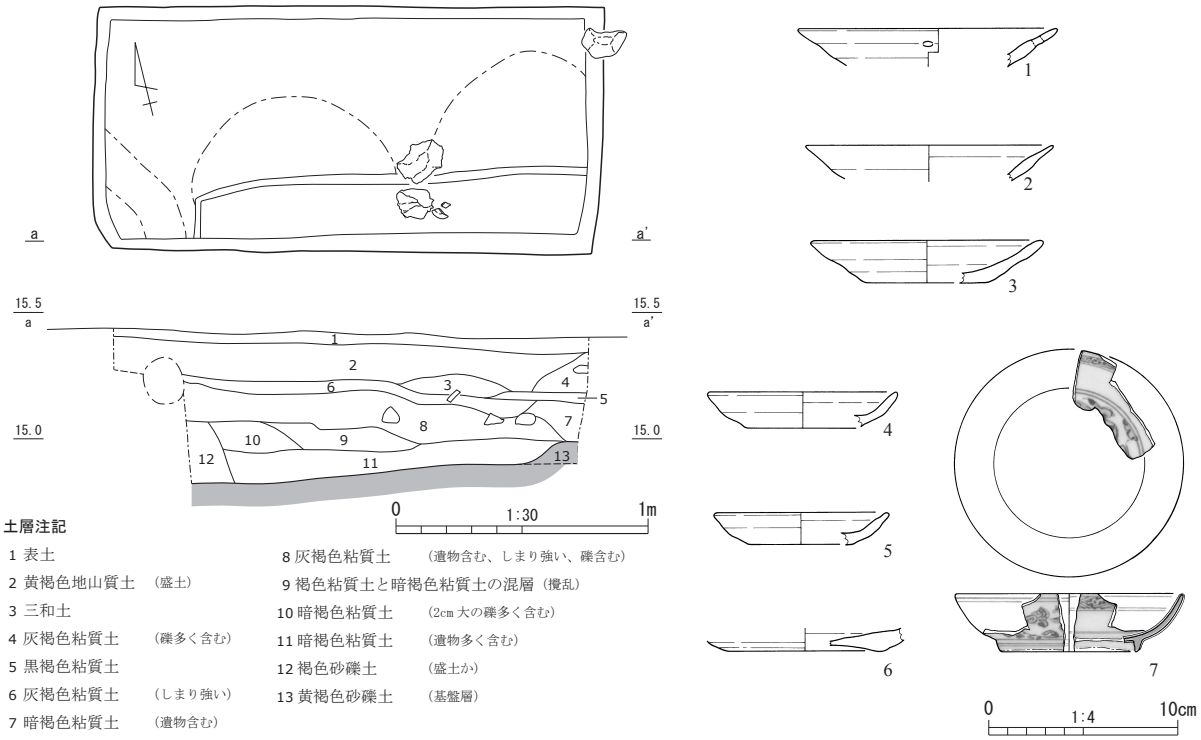


Fig.7　調査溝 1 詳細図・遺物実測図

（３）調査溝２の遺構と遺物

調査溝２は、元城町東照宮社殿の南東側に設置した調査区である。平坦面に構築された建物跡などの残存状態の確認を行った。この結果、小穴２基（SP01・02）、土坑１基（SK01）、近代以降の瓦集積（SX01）、窪地状の大型遺構（SX02）が確認できた。このうち、SX01 は完掘し、その下層は北壁と東壁付近で部分的に基盤層（Fig.8-19 層）まで掘削し、SP01･02、SK01、SX02 を検出した。このうち、SP01 と SX02 を部分的に掘削し、遺構の形状や残存状態、遺物の包含状況などを確認した。なお、SP02 と SK01 は平面検出に留めた。

SX01　SX01 は、調査溝２の表土下（Fig.8-5 層）に埋没した近代瓦を中心に構成される遺物集積遺構である。SX01 の範囲は調査区外に広がっているため、規模は明らかではない。SX01 に集積された近代瓦などの遺物の厚さは、調査区北側で最大 10cm、南側では最大 20cm のであった。SX01 の埋土は、暗褐色砂礫土であり、炭化物を多く含んでいた。近代に建立された元城町東照宮に葺かれた瓦が、一括して廃棄されたものと捉えられる。

SX01 出土遺物（Fig.9）　SX01 からは、大量の近代瓦やガラス片、戦国時代のかわらけや陶器が出土した。このうち、図示可能なかわらけや陶器、近代の軒瓦を図示した。8 ～ 10 はロクロかわらけである。全形をうかがえるものはないが、8 は口径 12.4cm、9 は底径 5.6cm、10 は底径 4.8cm である。底部外面にはいずれの個体も回転糸切の痕跡が確認できる。11 は初山産の内禿皿、12 は瀬戸産の丸皿でいずれも大窯３段階のもの捉えられる。13 は瀬戸産の擂鉢で大窯期のものである。14・15 は三つ葉葵文をもつ近代の軒瓦で、創建時の元城町東照宮に用いられたものとみられる。

SX02　SX02 は調査溝２の北西部において検出した窪地状の遺構である。遺構の残存状況や時期に関わる情報を得るための部分的な調査に留まったため、形状や規模は明らかではない。SX02 の埋土は 11 層から下層で、埋土中から多くのかわらけや陶器が出土した。出土遺物の時期からは、大窯３段階以降のものと捉えられる。なお、調査溝２の南端部において、遺物が集中的に出土した層位から下へ、約 0.6 m掘り下げたが、底面においては明確な基盤層が確認できていない。17 層からはかわらけの小片が出土しており、複数面の遺構と捉えられる。

SX02 出土遺物（Fig.9）SX02 からはかわらけや陶器が出土した。かわらけはいずれもロクロかわらけであり、全形がうかがえるものは 18 ～ 21・24・26 がある。口径は、13cm ～ 12cm を中心とした大型のもの（18 など）と 10cm ～ 8cm を中心とした小型のもの（19 など）がみられる。

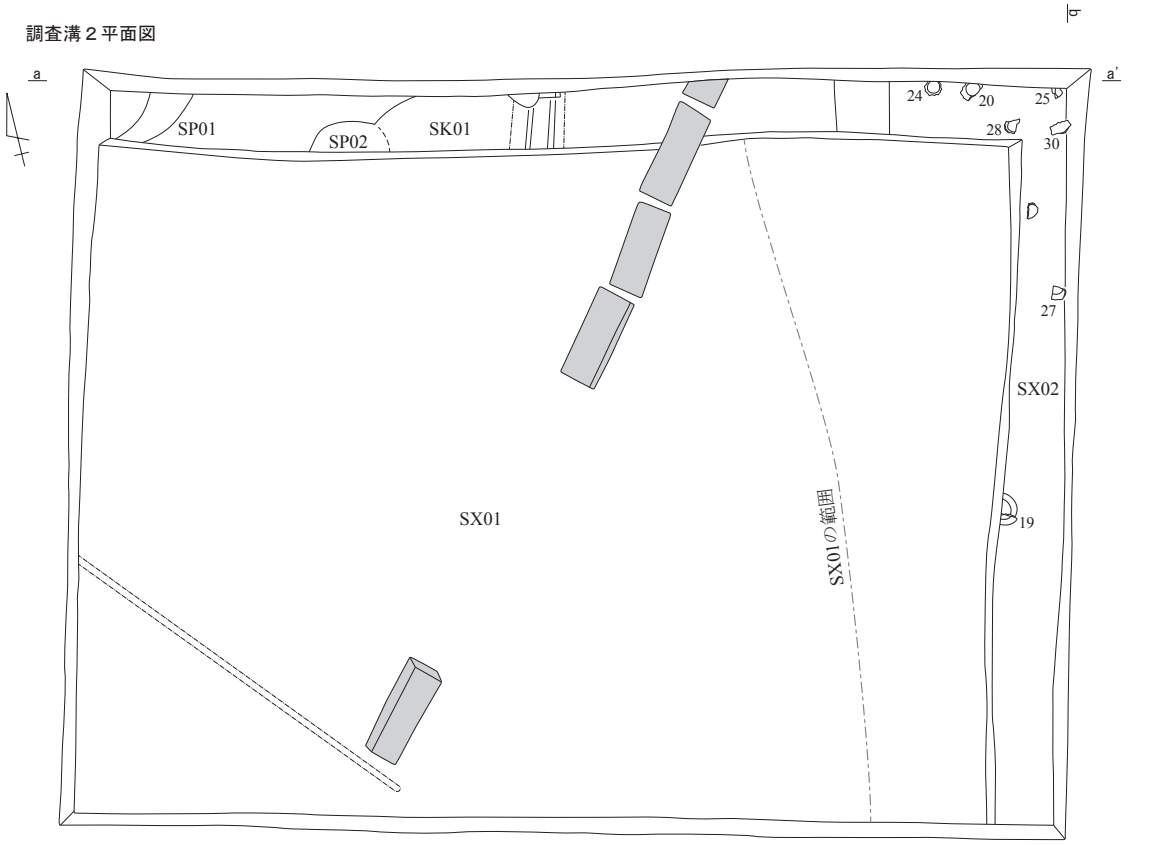
陶器類では天目茶碗と擂鉢が出土した。29 は瀬戸産の天目茶碗で、大窯２段階と捉えられる。30 は瀬戸産の擂鉢である。口径は約 28cm に復元でき、口縁部形態や焼成具合から大窯３段階前半のものと捉えられる。

SP01　SP01 は、調査溝２の北西隅で１/４ほどを検出した。検出面からの深さは 30cm あり、直径は 60cm 程度と想定できる。埋土は暗褐色粘質土で、かわらけの小片を含む。柱もしくは柵などの構造物に関わる遺構と捉えられる。遺構の時期は、15 世紀後半から 16 世紀代と捉えられる。

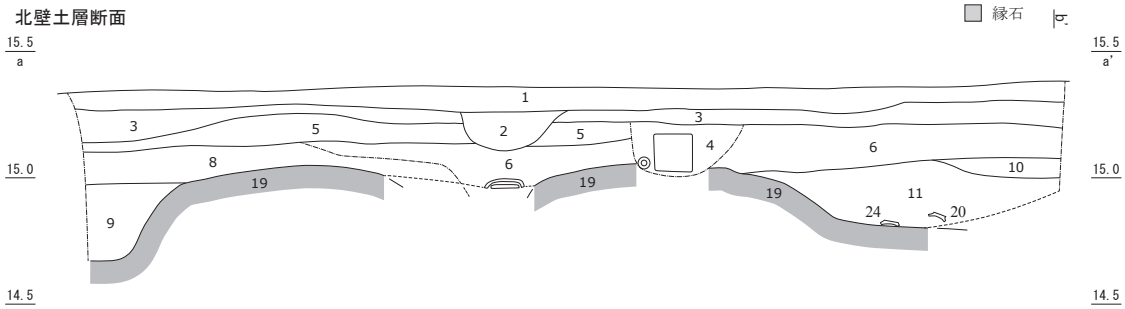
SP01 出土遺物（Fig.9）　SP01 からは、ロクロかわらけ（31）が１点出土した。31 は、口径 8.5cm･器高 1.8cm･底径 5.1cm で､表面色調は黄橙色である。15 世紀後半から 16 世紀代の特徴を示しており、SX02 から出土した小型のかわらけと類似することから、同時期のものと捉えられる。

表土出土遺物　表土から出土した遺物のうち図化可能な２点を図示した。32 は山茶碗で口径約 12cm に復元できる。33 はロクロかわらけで口径 7.5cm・器高 1.3cm・底径 5.9cm である。SX02 出土かわらけに比べ小型かつ浅身であり、近世のものと捉えられる。

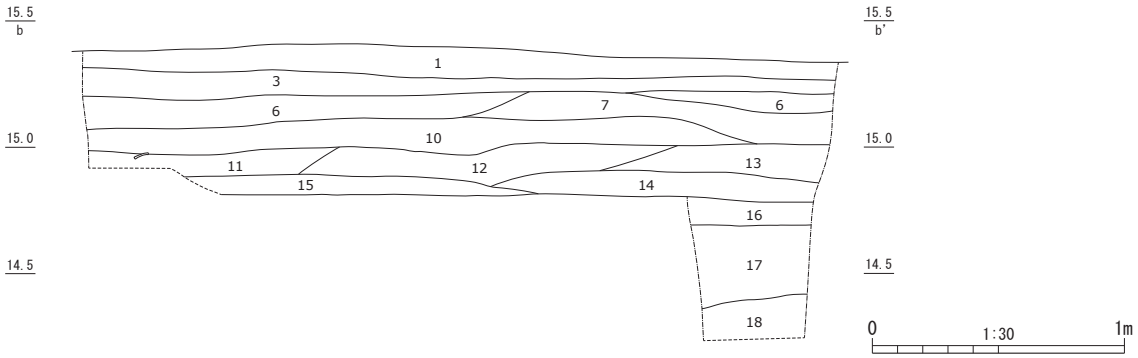
調査溝２平面図



北壁土層断面



東壁土層断面



調査溝２土層注記

1 表土
2 褐色砂質土　（攪乱）
3 褐色砂礫土　（黄褐色砂礫土含む）
4 褐色砂礫土　（暗褐色砂礫土との濁色層、攪乱）
5 暗褐色砂礫土　（SX01 埋土）
6 暗褐色粘質土　（攪乱）
7 灰褐色粘質土　（礫を多く含む）
8 褐色粘質土　（礫を多く含む）
9 褐色粘質土　（礫を多く含む、遺物含む、SP01 埋土）
10 褐色粘質土　（円礫含む、SX02 埋土）
11 褐色粘質土　（SX02 埋土）
12 暗褐色粘質土　（SX02 埋土、黄褐色・灰白色粘質土塊含む）
13 褐色粘質土　（SX02 埋土、遺物含む、黄褐色粘質土塊含む）
14 暗褐色粘質土　（SX02 埋土、遺物含む）
15 褐色粘質土　（SX02 埋土、遺物含む）
16 黄褐色シルトと暗灰色粘質土の混層（SX02 埋土か）
17 暗褐色粘質土
（SX02 埋土か、遺物含む、灰白色シルト小塊 30%含む）
18 暗灰黄褐色粘質土（基盤層か）
19 黄橙色粘質土　（基盤層）

Fig.8　調査溝２詳細図

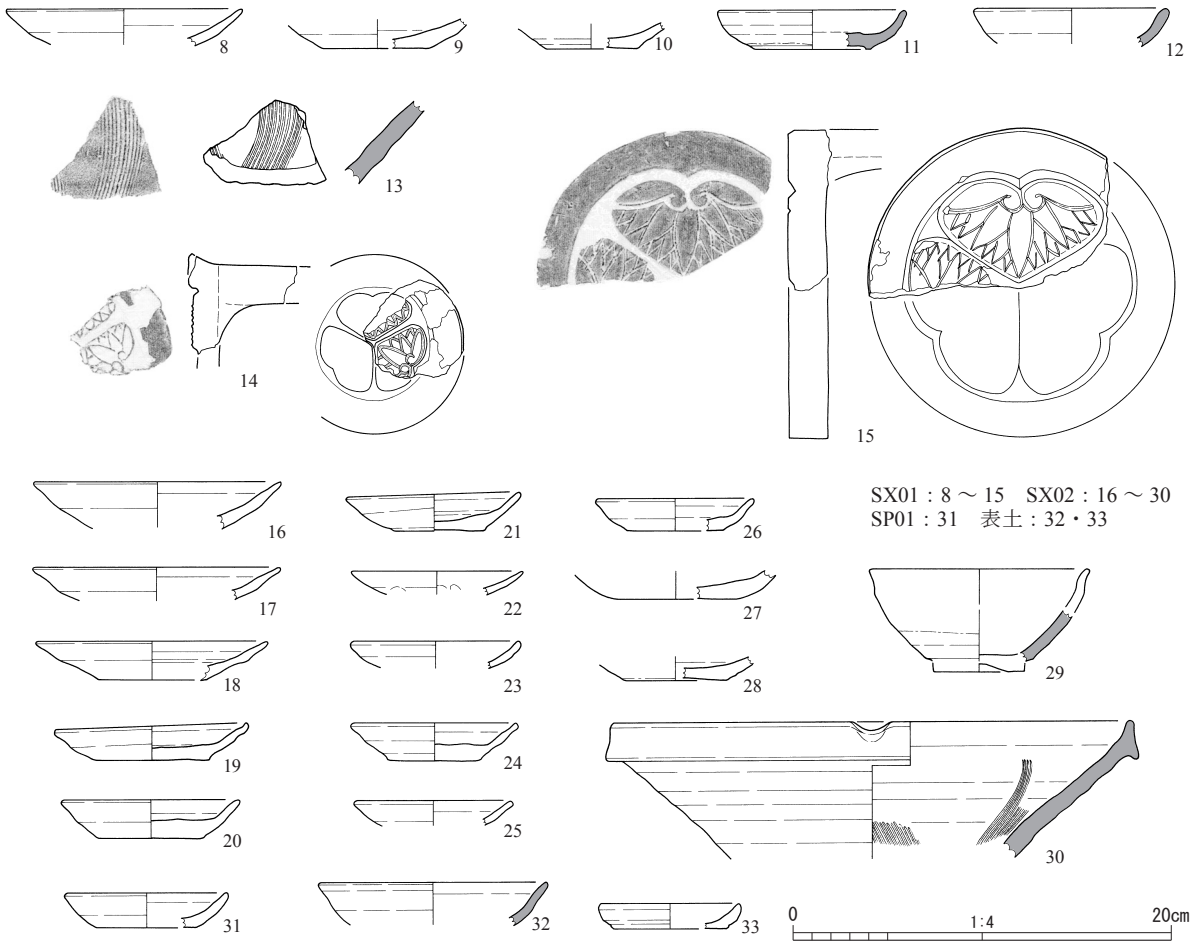


Fig.9　調査溝２出土遺物

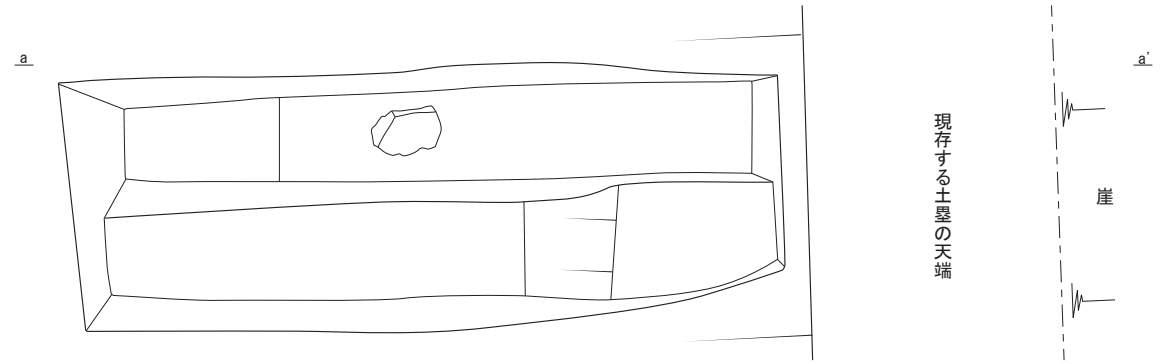
（４）調査溝３の遺構と遺物

調査溝３は、元城町東照宮の北東部において認識できる現況地形が盛り上がった部分に設定した調査区である。土塁の存在が予想されることから、土塁の有無と残存状況などについて確認を行った。発掘調査の結果、現況地表面で認められる地形の高まりは、土塁と、土塁裾部に堆積した土砂であることが明らかになった。

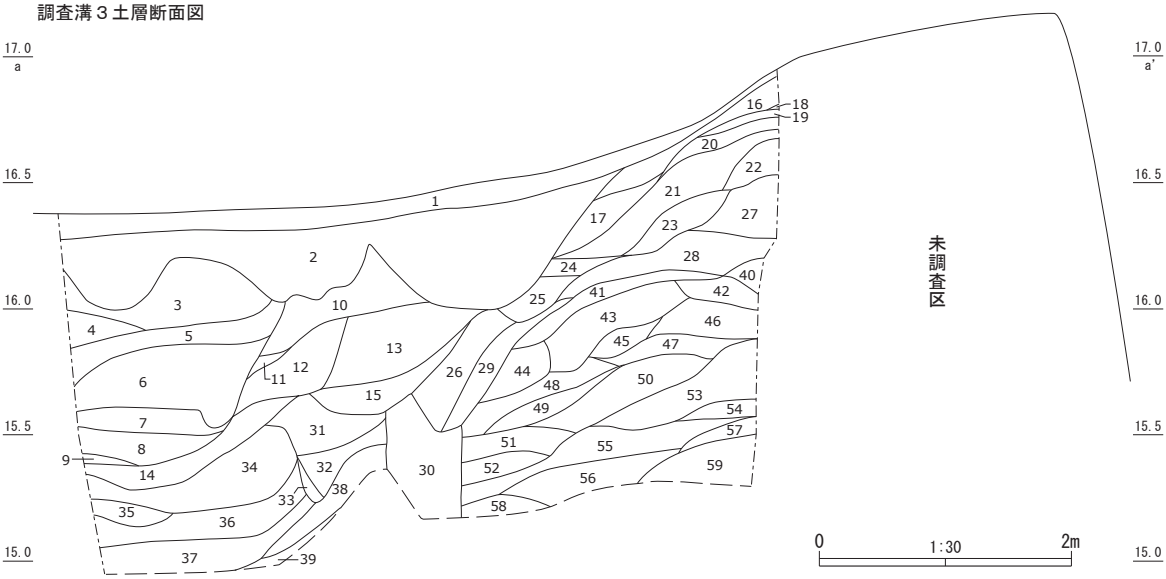
土　塁　土塁は、元城町東照宮の北東部にその痕跡がみられ、構築時には内側平坦面との比高差が 2.3 m以上あったことが明らかになった。また、土塁を部分的に断ち割り、土塁内部の構造と修築の有無などを確認した。土塁は土層堆積状況から、30 層を境として、30 層に先行する古い土塁（Ⅰ次土塁）と、30 層に後出する古い土塁（Ⅱ次土塁）の2時期に分けることができる。30 層は、地面と垂直にみられる暗褐色粘質土である。木材などを用いて構築した土留め構造物の痕跡とみられる。土塁裾部に堆積した土砂は、土塁斜面と内側平坦面の境界部分において３回以上の掘削が行われていることが認識できる。土塁の構築時期は明らかでないが、修築は、36 層から出土したかわらけ（Fig.10-35・36）の特徴から、16 世紀以降と想定できる。

出土遺物　調査溝３からは、須恵器、かわらけ、陶器が出土した。34 は須恵器の甕で、口径は約 21cm に復元できる。７・８世紀のものと捉えられる。Fig.10-25 層から出土したものである。35・36 はロクロかわらけである。いずれも Fig.10-21 層から出土したものである。底径は、35 は 5cm、36 は 6cm に復元できる。なお、35 の口縁部側面には焼成後の穿孔が認められる。37 は、瀬戸産の擂鉢で大窯期のものである。

調査溝３平面図



調査溝３土層断面図



1 表土
2 暗褐粘質土（しまり不良）
3 灰褐色粘質土
4 暗褐色粘質土
5 灰黄褐色粘質土
6 褐色粘質土
7 暗褐色粘質土
8 暗褐色粘質土（灰黄色粘質土混ざる）
9 灰黄褐色粘質土
10 褐色粘質土
11 暗褐色粘質土
12 暗褐色粘質土
13 灰黄褐色粘質土
14 暗褐色粘質土
15 暗褐色粘質土と褐色粘質土の濁色層
16 灰黄褐色粘質土
17 灰黄色粘質土
18 暗褐色砂質土（小円礫混じり）
19 暗褐色砂質土（小円礫混じり）
20 明灰黄褐色粘質土（木目細かく、均質）
21 暗褐色砂質土（小円礫混じり）
22 明灰黄褐色粘質土（木目細かく、均質）
23 暗褐色砂質土と明灰黄褐色粘質土の混層
24 灰黄色粘質土
25 暗褐色粘質土
26 黄褐色粘質土（灰白色・橙色塊含む、しまり強い）
27 褐色砂礫土
28 黒褐色粘質土
29 暗褐色粘質土
30 暗褐色粘質土（土留構造物の痕跡か）
31 灰黄褐色粘質土
32 暗褐色粘質土
33 灰褐色粘質土
34 暗褐色粘質土（灰色・橙色粘質土・焼土・炭化物含む）
35 灰黄褐色粘質土
36 灰褐色粘質土（緻密・炭化物含む）
37 灰褐色砂礫土
38 灰褐色粘質土（しまり強い）
39 褐色砂礫土
40 灰黄色粘質土
41 灰白色シルト
42 褐色粘質土
43 暗黄褐色粘質土
44 暗褐色粘質土
45 暗黄褐色粘質土
46 黒褐色粘質土
47 暗黄褐色粘質土
48 暗褐色粘質土（ややしまり良い）
49 暗褐色砂礫土
50 褐色粘質土
51 褐色砂礫土
52 褐色粘質土
53 暗褐色粘質土
54 暗黄褐色粘質土
55 暗褐色粘質土
56 暗褐色粘質土
57 黒褐色粘質土
58 褐色砂礫土
59 黄褐色砂礫土

調査溝３出土遺物

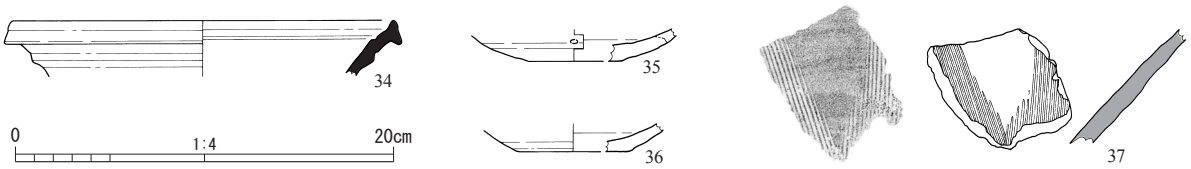


Fig.10　　調査溝３詳細図・遺物実測図

第３章　伝松下屋敷２次調査の成果

１　伝松下屋敷をめぐる環境

（１）地理的環境

伝松下屋敷は、浜松市南区頭陀寺町に所在し、真言宗頭陀寺の門前に位置する。頭陀寺町は天竜川平野の南部にあり、頭陀寺や伝松下屋敷は、天竜川の分流である芳川によって形成された自然堤防上に展開している。天竜川平野に展開する中世の居館や居館推定地・伝承地は、天竜川の旧流路沿いに形成された自然堤防上や微高地上に偏在している。伝松下屋敷などの居館は、天竜川とその分流を活かした水運と灌漑農業に必要な水利の確保に適した場所に構築されたと捉えられる。

（２）歴史的環境

原　始　伝松下屋敷は芳川流域に展開し、東には弥生時代後期後半を中心とした時期に拠点的な集落が展開した飯田遺跡群がある。また南にあるツツミドオリ銅鐸出土地では２点の銅鐸が出土したことが知られている。

古　代　伝松下屋敷は飛鳥時代には、遠江国長田郡に属し、和銅２年（709）に東海道を境として２郡に分けられてからは長下郡に属した。伝松下屋敷の北側を古代の東海道が北東から南西へと通っている。伝松下屋敷の１次調査では、奈良時代の遺物が出土しており、奈良時代の遺跡が展開していたことをうかがい知ることができる。伝松下屋敷の北側には頭陀寺が所在する。創建時の場所は定かではないが、頭陀寺は大宝３年（703）創建と伝わる。『日本三大実録』によると貞観５年（863）に定額寺に指定され（静岡県 1994）、長保２年（1000）には現在の地へ移転している。

中　世　頭陀寺や伝松下屋敷は川勾荘に属していた。頭陀寺は川勾荘北西部に位置し、付け替え以前の芳川の水利を掌握できる位置にある。頭陀寺は川勾荘の管理を担っており、長承年間（1132-1135）には、東に接する池田荘との境界をめぐる紛争の記録がみられる（静岡県 1994）。

頭陀寺の門前に戦国時代の武将、松下氏が居を構えたのは、16 世紀前半以降のこととみられる。松下氏は、遠江国・駿河国を治めた今川氏の家臣である引馬城主・飯尾氏に仕えていた。桶狭間の戦いを契機とした今川氏の弱体化に伴い、今川氏真が「遠州忿劇」と表現する争乱が起こった。この戦乱により、伝松下屋敷とその周辺に展開したと推定される頭陀寺城が焼失し、頭陀寺千住院の日諭が今川氏真より再建を命じられている（静岡県 1997）。遠州忿劇から徳川家康の遠江進出の間の松下氏の動向は定かでない。徳川家康が浜松を領有した頃には、松下之綱が徳川氏に仕え、浜松城東側の下垂口付近に屋敷を構えたことが知られている。

近世以降　天正 18 年（1590）の小田原の陣の後、松下之綱は、豊臣秀吉によって久野城（静岡県袋井市）の城主に取り立てられる。１次調査に調査によって 16 世紀末葉から 17 世紀初頭頃と捉えられる瓦が出土しており、瓦を用いた構造物が存在した可能性が指摘されている（太田 2003）。松下氏の中には、頭陀寺の門前に位置する屋敷に留まるものもおり、江戸時代を通じ、松下氏の屋敷として利用されたことが知られている。近代には、松下氏が屋敷を離れ、松下屋敷の跡地は道路整備や区画整理、工場建設などの開発によって、屋敷としての姿を失っていった。いっぽう、屋敷の北西部は、都市公園「頭陀寺第一公園」の一部になり、土塁状の地形の起伏が残された。現地には、松下氏の屋敷があったことを伝える石碑が建てられている。

Fig.11　伝松下屋敷とその周辺の中世屋敷地の分布状況

２　伝松下屋敷の調査履歴

伝松下屋敷は、一辺 100m 四方ほどの屋敷地であり、周囲には堀と土塁がめぐらされていたことが絵図からうかがえる。屋敷の周囲を取り囲んだ土塁のうち、北西隅角部にあたる部分は、頭陀寺第一公園の北東部に小高い地形として残存している。しかし、その他の屋敷地は、宅地化や道路整備により当時の姿を失っている。頭陀寺第一公園の東側隣接地では、2001 年に開発工事に先立ち発掘調査が行われ、屋敷地の存在を裏付ける遺構や遺物が検出されている。

１次調査　１次調査は､2001 年に実施した。伝松下屋敷の北側中央部を中心に発掘調査が行われ、礎石建物や苑池、区画溝等が確認されている。これらの遺構は焼土や盛土を鍵層として３つの遺構面に分けて認識される。最も古い遺構は苑池（SG01）であり、15 世紀後半を中心とした時期のものと捉えられる。15 世紀後半から 16 世紀前半の陶器やかわらけが出土した。その上位には、焼失、再建された２面の礎石建物が検出され、頭陀寺城焼失・復興の記録との関連が指摘されている。また､17 世紀初頭以前の特徴を持つ瓦が出土しており､瓦葺建物が存在した可能性が示された。なお、中世に造成を行い、屋敷地がつくられたことが明らかにされている（太田 2003）。

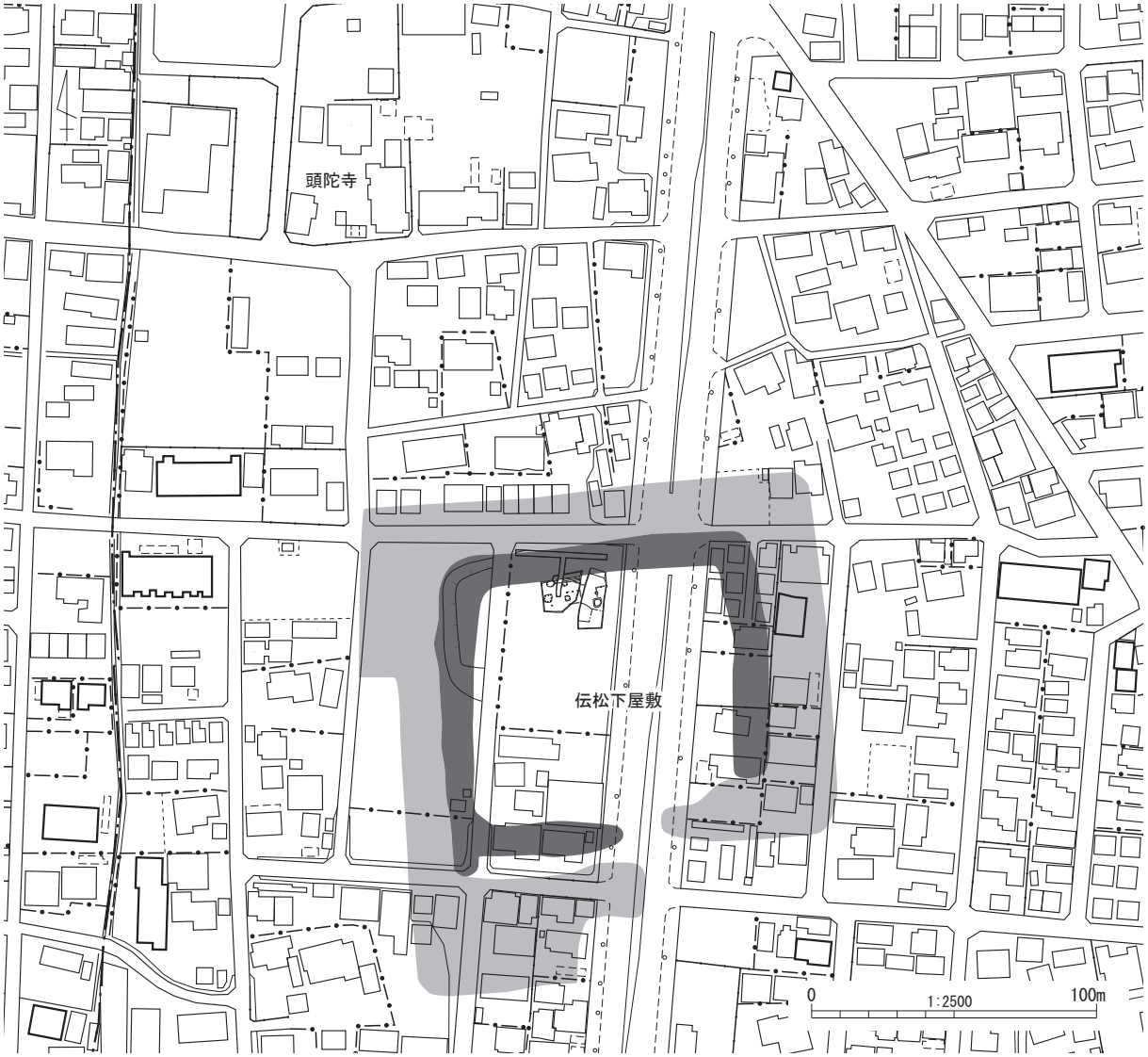


Fig.12　伝松下屋敷の構造

３　調査の方法と経過

（１）調査方法

調査区の設定　頭陀寺第一公園北東部の地形が盛り上がった部分に２つの調査溝を設定し、土塁の有無や残存状態を確認した。調査溝は現地表にみられる地形の盛り上がりが、土塁か否かの確認に主眼を置いたため、最小限の範囲で土塁を下層まで掘り抜き内部構造の把握を試みた。土塁の旧状をとどめている可能性が高い部分に幅１ｍ、全長４ｍの調査溝１を設定し、土塁の残存状況や堀の埋没状況の確認を行った。また、地形の盛り上がった部分の頂部に、調査溝１にて検出した土塁外面と直交するように調査溝２を設定し、構造の把握を行った。

記録作成　発掘調査の記録は、図面類はトータルステーション等を用いて作成した。写真は、カラーリバーサルフィルムおよびデジタル一眼レフカメラを用いた。

（２）調査経過

発掘調査・公開事業　発掘調査は 2015 年 9 月 7 ～ 18 日にかけて実施した。調査期間中の 9 月 12 日に現地説明会を開催し、市民を中心に 231 人が参加した。また、9 月 14 日には浜松市立芳川北小学校の６年生を対象とした発掘体験を開催し、児童 106 人が参加した。

整理作業　調査終了後、北区引佐町井伊谷に所在する浜松市埋蔵文化財調査事務所にて、整理作業を実施した。

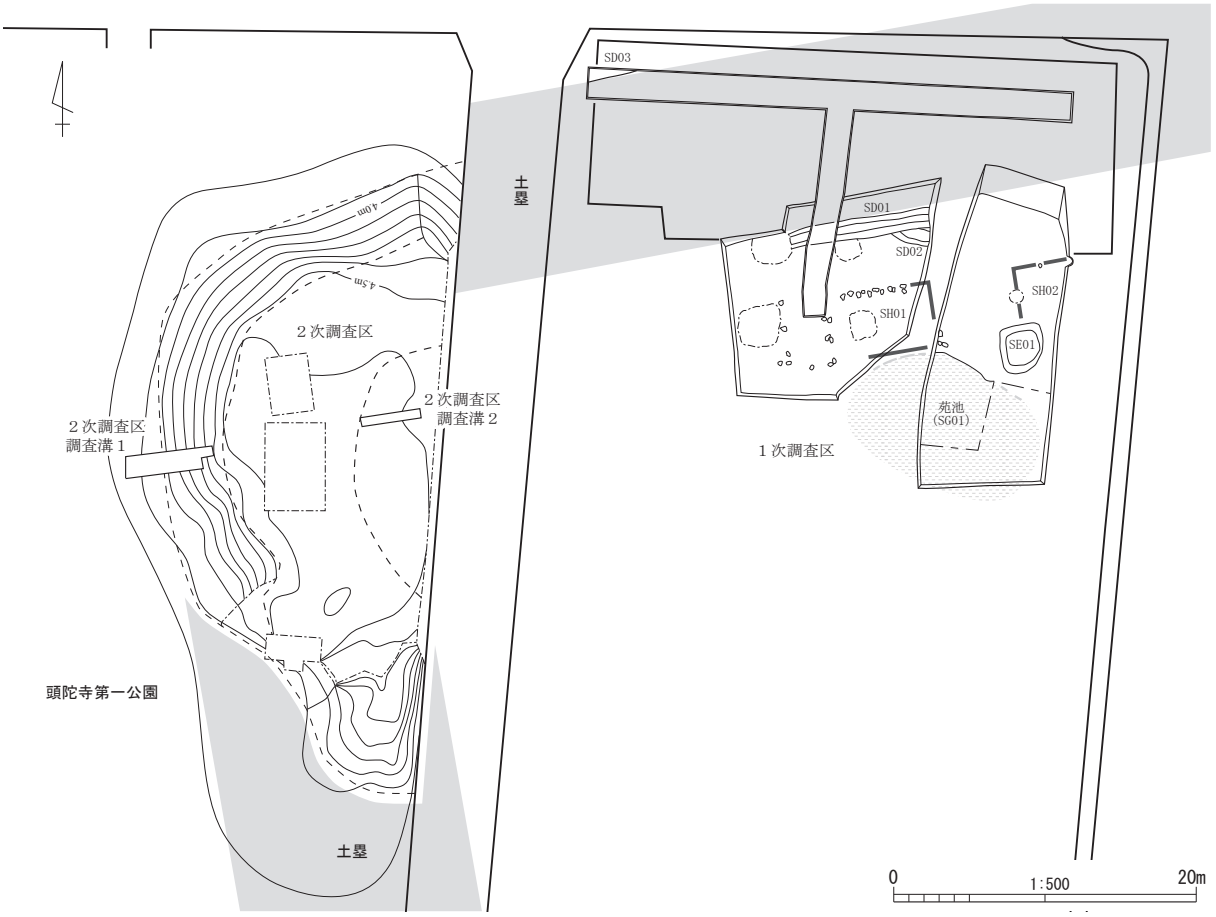


Fig.13　伝松下屋敷調査区配置図

４　伝松下屋敷２次調査の成果

（１）調査成果の概要

伝松下屋敷２次調査では、伝松下屋敷の南西部にあたると推定される頭陀寺第一公園の北東部において発掘調査を実施した。頭陀寺第一公園の北東部には、現況で公園平坦部と 1.5m ほどの高低差をもった地形の高まりがみられ、屋敷地を取り囲んだ土塁の痕跡と考えられてきた。この地形の高まりが認められる部分において２つの調査溝を設定し、土塁や堀跡の遺存を確認した。

（２）調査溝１

頭陀寺第一公園北東部に所在する地形の高まりのうち、西辺の斜面に調査溝１を設定し、遺構・遺物の有無と残存状態の確認を行った。調査溝１では、土塁と堀跡を確認した。

基本層序　調査溝１において確認できた基本層序は上層から、表土・盛土（Fig.14 上 -1 ～ 6 層）、堀跡埋土（7 ～ 11 層）、土塁崩落土（12･13 層）、土塁盛土（14 ～ 19 層）、土塁基盤層（20 層）である。

土　塁　土塁は、調査溝１の東側において検出した。現地表面における比高差は、1.1 m程度である。水平に土砂が堆積した Fig.14 上 -20 層の上に土塁を構築した状況が認められた。土塁の盛土は、褐色系粘質土を主体的に用いており、14 ～ 19 層が確認できる。土塁は、後述する堀跡の上面と１m以上の高低差があることが明らかになった。なお、19 層は、屋敷地の造成土と土質や検出標高が類似しており、屋敷地造成に伴う整地土の可能性が指摘できる。

堀　跡　堀跡は、調査溝１の西側において検出した。堀跡は灰色系粘土により埋没している。堀の深さは湧水が顕著なため安全が確保できず、確認できなかった。堀跡埋土の最上層（7 層）は、灰色粘質土であり、水田床土と捉えられる。埋没後、造成され公園として利用されるまでの間は、水田や湿地であったとみられる。なお、湧水が顕著であったため、堀底は検出できなかったが、堀の深さは土塁構築面から 0.5 m以上の深さがあったといえる。堀は、湧水が顕著なことから水を湛えた濠、もしくは沼状であったと想定できる。

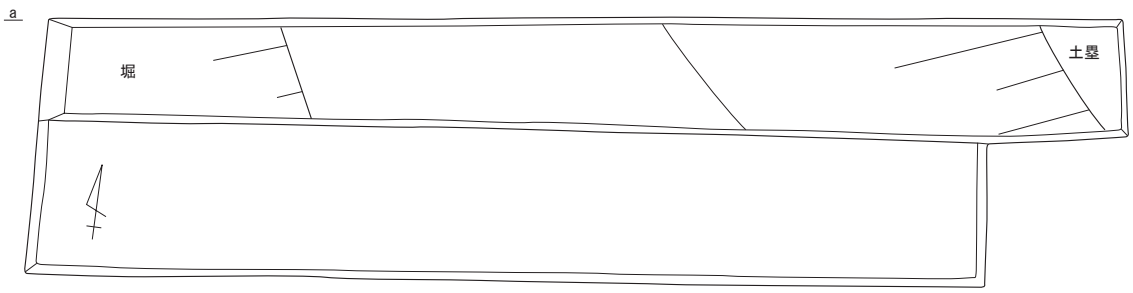
（３）調査溝２

調査溝２は、土塁頂部の平坦面に設定した調査溝である。土塁の規模の確認や、土塁上の遺構の有無の確認を目的として設定した。調査溝２では、土塁構築に伴うと判断できる明確な土層の状況は確認できなかったが、調査溝２の東端は屋敷地の縁辺部であることが明らかになった。

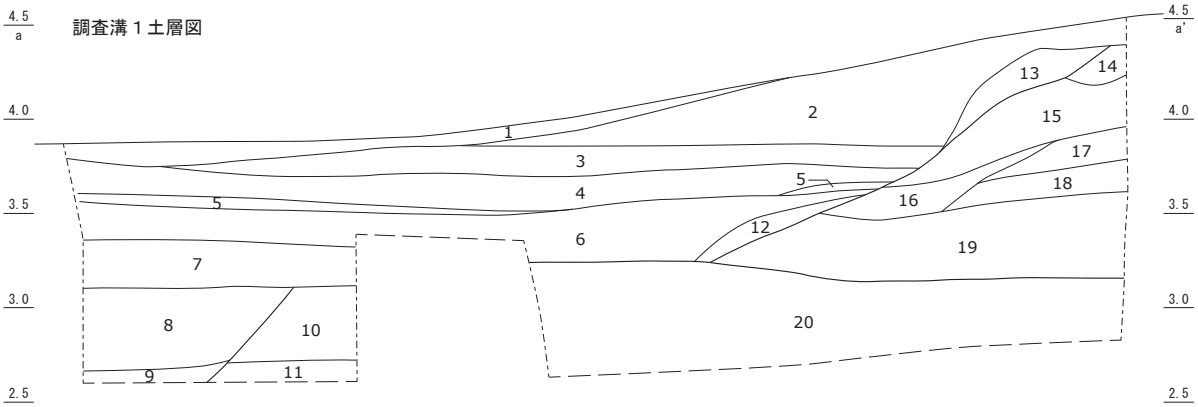
基本層序　調査溝２において確認できた層位は、上位層から表土･攪乱（Fig.14 下 -1 ～ 3 層）、近世･近代の土層（4 ～ 15 層）、造成土（16 層）、焼土・炭化物層（17 層）、中世の造成土（18 ～ 20 層）である。8 層は灰白色シルトであり人為的に持ち込まれたものとみられる。また、10・11 層は小規模な土手状に褐色粘質土を盛り上げている。近代の記録にみられる社殿の痕跡の可能性がある。20 層の褐灰色粘質土は、調査溝１の 20 層と同様の土質・検出標高であり、一連の土層と捉えられる。

焼土・炭化物層　調査溝２東端の 17 層（標高 3.5 m付近）から焼土塊や炭化物を多く含む土層が水平堆積した状態を確認できた。調査溝２の東端は土塁の内側であった蓋然性が高い。なお、17 層中からは、15・16 世紀代の特徴を有したかわらけや土師質土器の鍋（Fig.15 下 -8 ～ 10）が出土している。1次調査で検出された焼土層とほぼ同じ標高で検出しており、同一の事象によって生じた焼土や炭化物であった可能性が指摘できる。

調査溝１平面図



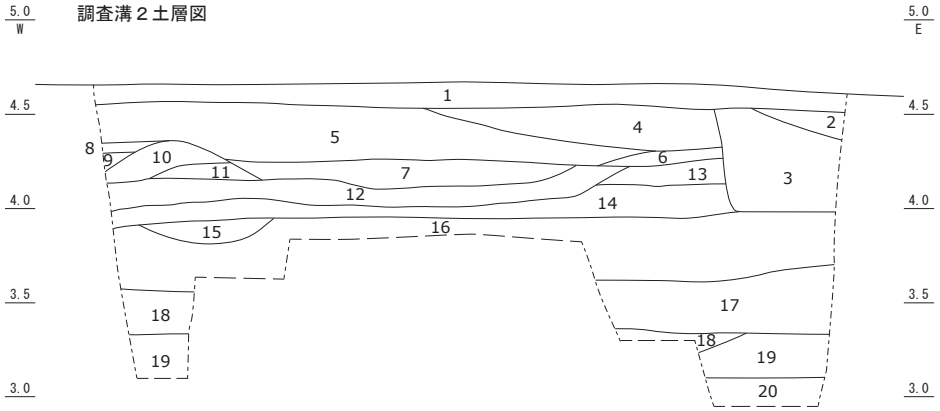
調査溝１土層図



調査溝１土層注記

1 暗褐色土
2 灰黄褐色土（礫多く含む）
3 灰褐色粘質土（礫含む）
4 褐色礫土（造成土）
5 黒褐色粘質土（有機質・旧表土）
6 橙色礫土（造成土）
7 灰色粘質土（水田床土）
8 暗褐灰色粘質土（堀埋土）
9 暗灰色粘土（堀埋土、湧水顕著）
10 浅灰黄褐色粘質土
11 灰色粘土（湧水顕著）
12 灰褐色粘質土（礫含む、土塁崩落土か）
13 暗褐色粘質土（締まり不良）
14 暗褐色粘質土
15 褐色粘質土
16 暗褐色粘質土
17 褐色粘質土
18 褐色粘質土（灰白色シルト 20%含む）
19 褐色粘質土（有機質・灰白色シルト 40%含む）
20 褐灰色粘質土（基盤層）

調査溝２土層図



調査溝２土層注記

1 灰黄褐色土
2 暗黄褐色土
3 黒色土（攪乱）
4 灰黄褐色砂質土（灰色シルト 40%含む）
5 褐色砂質土（灰白シルト 30%含む）
6 褐色砂質土（灰白シルト 40%含む）
7 明褐色砂質土
8 灰白シルト（褐色粘質土 40%含む）
9 褐色砂質土
10 褐色粘質土（灰白色シルト 10%含む）
11 褐色砂質土
12 暗褐色砂質土
13 明褐色砂質土
14 明灰褐色砂質土
15 明褐色粘質土（灰白色粘質土 40%含む）
16 明褐色砂質土
17 暗褐色粘質土（炭化物・焼土塊多く含む）
18 暗褐色粘質土（褐灰色砂 10%含む）
19 褐灰色砂
20 褐灰色粘質土（褐灰色砂 20%含む）

0 1:40 2m

Fig.14　調査溝１・２詳細図

（４）出土遺物

出土遺物を Fig.15 に示した。調査溝１、調査溝２から遺物が出土したほか、土塁上に散布した資料を図化し、掲載した。

調査溝１（Fig.15）　調査溝１からは１～４が出土した。いずれも、8・9 層中から出土したものである。1 は、山茶碗で、高台は不整形になっており、13 世紀のものと捉えられる。2 は肥前磁器である。高台の断面形状は三角形であり、稜は丸みがある。17 世紀後半から 18 世紀代の遺物と捉えられる。3 は瀬戸産の小中で、登窯第８・９小期の所産と捉えられる。4 は、巴文を持つ軒瓦である。小径であり、桟瓦と捉えられる。

調査溝２（Fig.15）　調査溝２からは 5 ～ 13 が出土した。5 ～ 7 は須恵器である。5 は､須恵器坏蓋、6 は摘み蓋、7 は広口長頸壺である。いずれも７・８世紀のものである。8・9 は、かわらけである。10 はく字口縁内耳鍋、11 は羽付釜、12 は煮沸具の底部である。8 ～ 12 は、戦国時代のものと捉えられる。13 は、丸瓦である。凸面には縄目タタキ痕、凹面には細かな布目圧痕とコビキ A 類の痕跡がみられる。16 世紀末の瓦製作技法の特徴を多く残している。

表採資料（Fig.15）　表面採集遺物のうち図化可能なものを６点図化した。14･15 は山茶碗である。16 は瀬戸の縁釉はさみ皿で大窯１段階のもの、17 は志戸呂産の擂鉢で、古瀬戸後期Ⅳ段階のものと捉えられる。18 は、瀬戸産の擂鉢で、登窯５～７小期のものと捉えられ、19 は、関西系陶器もしくは瀬戸美濃で模倣生産された関西系陶器の擂鉢である。瀬戸美濃産であれば 19 世紀代と捉えられる。これらの遺物は、いずれも土塁の北西隅角部で採集したものである。土塁盛土に用いられた土砂の中に含まれた遺物と、太平洋戦争時に砲弾が炸裂したと伝わる地点が近傍に所在していることから、爆発に伴い埋没していた遺物が地表に散乱したものとがあると捉えられる。

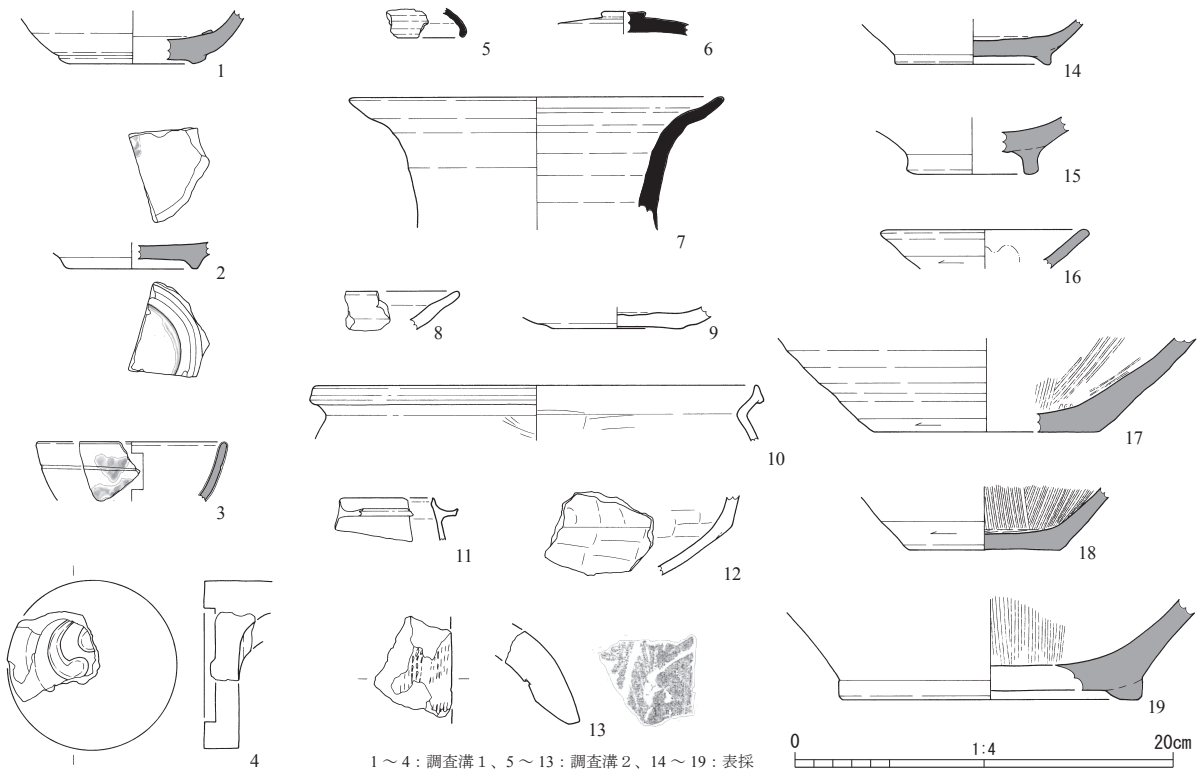


Fig.15　伝松下屋敷２次調査出土遺物実測図

第４章　総　括

１　浜松城跡 11 次調査の成果と意義

（１）調査成果

元城町東照宮境内において、地下に埋もれた浜松城と引馬城の残存状態の確認を行った。発掘調査の結果、戦国時代を中心とした時期の遺構や遺物が良好な状態で埋没していることが明らかになった。以下、調査成果を時期ごとに要約し、浜松城跡 11 次調査の総括とする。

古代・中世前半　調査溝２からは、須恵器や山茶碗が少量ではあるが出土している。浜松城とその周辺には古墳や横穴墓が展開しており、元城町東照宮とその周辺にも古墳や集落が展開していた可能性がうかがえる。また鎌倉時代には、元城町東照宮の北東に引馬宿が展開しており、元城町東照宮の所在地も、当該期に利用されていた可能性がうかがえる。

戦国時代　戦国時代に関わる遺構は SX02 や SP01・02、SK01、土塁が確認できた。また、遺物も 15 世紀後半から 16 世紀代のものが最も多く確認でき、調査対象地における主要な時期と捉えられる。

SX02 は、調査溝２の東側で検出した窪地状の地形である。調査区外に広がる遺構であり、遺構の規模や形態は明らかでない。しかし、SX02 の埋土うち、11 層では、かわらけや陶器を多く含み、一括性の高い遺物群が検出できた。11 層で出土した遺物の時期は、大窯３段階前半（16 世紀後半）と捉えられ、SX02 の最終的な埋没時期は、11 層の一括遺物が示す 16 世紀後半を中心とした時期と捉えられる。なお、SX02 は、11 層よりも下層の 17 層からも出土遺物が確認できた。SX02 の形成は、16 世紀後半よりも古い時期に遡ることを示す情報として注目できる。

北東部では土塁の残存を確認し、内側の平坦面と 2.3 m以上の高低差をもった土塁が残存していることが明らかになった。元城町東照宮境内東側に認められる地形の高まりのうち、特に高い北東部分には土塁が良好な状態で埋没していることが明らかになった。土塁は、構築初期段階のものと改修後のものの２時期に分けることができる。また、土塁埋没部分よりも一段下がった部分では土塁の崩落土や土砂の集積が確認できた。土塁の構築時期は、資料が少なく不明確であるが、36 層中から出土したかわらけの形態的特徴から 16 世紀を中心とした時期に構築・修築が行われたと捉えてよいだろう。

出土遺物ではかわらけの出土量が突出している点が特筆できる。また、出土遺物の多くは 15 世紀後半から 16 世紀代のものと捉えられ、時期に偏在性が認められる。遺物が示す時期は飯尾氏や徳川氏が引馬城を拠点とした時期と重なり、引馬城の中心的な空間であったことがうかがえる。

近　世　近世の遺構や遺物などの情報は非常に限られている。戦国時代に中心的な空間であった引馬城が、浜松城へと改築・拡幅され、近世浜松城へと変化する中で、城絵図からうかがい知ることができるような付属的な空間へと変化していったと捉えられる。

近現代　SX01 は、調査溝２で検出した近現代の遺構である。出土遺物の多くは近代の桟瓦であり、軒瓦には、「丸に三つ葉葵」の紋様がみられる。明治 19 年（1886）に建立され、戦災で焼失した社殿の屋根に葺かれたものが集積されたものと捉えられる。また、SX01 の中には戦国時代のかわらけや陶器が混入しており、近現代の遺構とはいえ、引馬城から元城町東照宮への変遷をうかがい知る上で重要な情報が含まれており、注目できる。

（２）意義と課題

元城町東照宮が所在する浜松城北東部は、江戸時代に「古城」と称され、浜松城に先立つ城館「引馬城」の推定地とされてきた。浜松城跡 11 次調査により、土塁や豊富なかわらけの出土など城の存在や武家儀礼の執行をうかがえる情報を得た。遺物の主体的な時期は 15 世紀後半～ 16 世紀代であり、飯尾氏や徳川氏が引馬城を利用した時期と重なる。江戸時代の絵図に「古城」と記された部分に、浜松城に先立つ城館（引馬城）があった可能性が発掘調査により初めて確認できたと言える。

引馬城の形成時期や変遷については調査成果の蓄積を待って検討すべき課題であるが、中世城館から近世城郭、元城町東照宮へと至る歴史の履歴を示す情報が良好な状態で埋没していることを確認できたことが浜松城跡 11 次調査の成果といえる。

２　伝松下屋敷２次調査の成果と意義

伝松下屋敷北西隅角部において２次調査を実施し、頭陀寺第一公園北東部に残る小高い地形は、屋敷縁辺部に配置された土塁の痕跡であることが明らかになった。また、土塁の外周には堀があることも確認できた。土塁と堀の比高差は 1.8m 以上あったことが明らかになった。頭陀寺第一公園北東部の高まりのうち東端部分では、１次調査時と同様の標高で、16 世紀代のものと捉えられる焼土や炭化物を含む土層が確認できた。屋敷が 16 世紀代に焼失した際には、屋敷地の一部であった可能性が高いといえる。

伝松下屋敷の構造や変遷、歴史的な叙述は、調査成果を蓄積したうえで再評価する必要がある。しかし、１次調査で検出された礎石建物や、礎石建物の焼失・復興の時期が文献史料にみられる頭陀寺城の焼失・復興と共通する点に加え、２次調査により、土塁や堀跡が検出されたことで、伝松下屋敷の地が頭陀寺城の一部であった可能性がより高まったといえる。

参考・引用文献

太田好治　1996『浜松城跡－考古学的調査の記録－』浜松市教育委員会
太田好治　2003「伝松下屋敷跡の調査」『浜松市遺跡調査集報』浜松市教育委員会
大橋康二　1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
小野正敏　1982「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と年代 」『貿易陶磁研究』No.2
加藤理文　1994「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論文集
北垣聰一郎　1987『石垣普請』法政大学出版局
栗原雅也　2005「初山焼」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
鈴木一有　2013「浜松城の発掘調査と新知見」『考古学ジャーナル』644　ニュー・サイエンス社
鈴木一有　2014「遠江における守護所と城下町の様相」『守護所シンポジウム２@清洲 新・清洲会議　資料集』
　新・清洲会議実行委員会
中野晴久　2012「第１章 総論 第３節 常滑窯」『愛知県史』別編 窯業３ 中世・近世 常滑系　愛知県
藤澤良祐　2007「第１章 総論」『愛知県史』別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系　愛知県
松井一明　2005「中世見付とその周辺－土器陶磁器から見た遠江国府・守護所を中心とした物資流通のネットワーク」
　『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
静岡県　1989『静岡県史』資料編６ 中世二
静岡県　1992『静岡県史』資料編７ 中世三
静岡県　1994『静岡県史』通史編１ 古代
静岡県　1997『静岡県史』通史編２ 中世
静岡県教育委員会　1981『静岡県の中世城館跡』
浜松市　1968『浜松市史』二

※浜松城跡の報告書は、８頁 Tab.2 を参照

浜松城跡 11 次 調査地全景（南東から）

1　浜松城跡 11 次調査 調査溝２全景（南西から）

2　調査溝２ 遺物出土状況（北東から）

3　調査溝２ 遺物出土状況（南東から）

4　調査溝１ 全景（北西から）

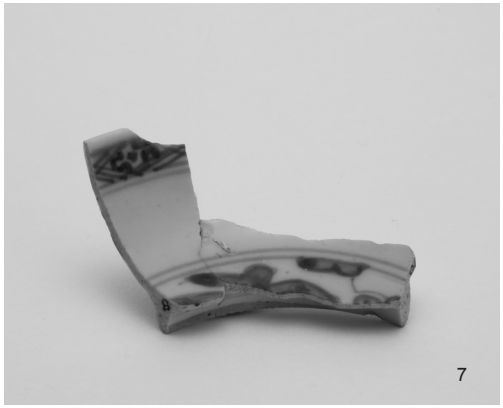
1　浜松城跡 11 次調査 調査溝３ 全景（南西から）

2　調査溝３ 土塁調査状況（南東から）

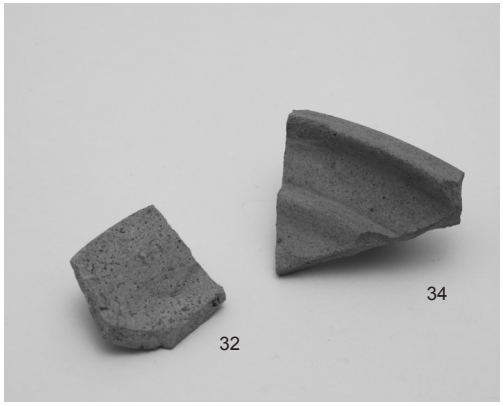
1　浜松城跡 11 次調査 出土かわらけ

2　SX02 出土かわらけ

1　浜松城跡 11 次調査 主要出土遺物



2　調査溝 1 出土遺物



3　城跡以前の 出土遺物

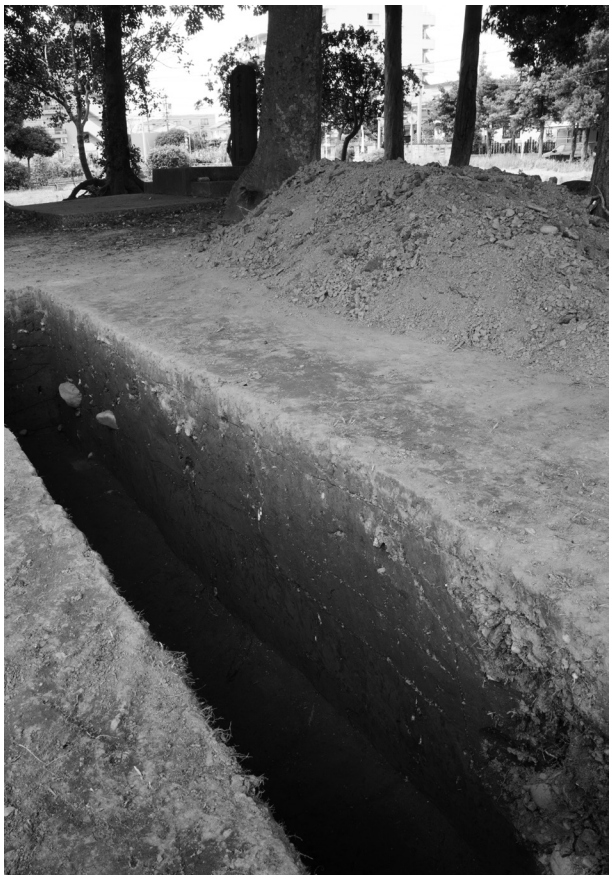
4　調査溝 2 出土瓦（近代）

1　伝松下屋敷２次 調査地全景（西から）

2　調査溝１ 土塁調査状況（西から）

3　調査溝１ 土塁盛土検出状況（南西から）

4　調査溝１ 堀跡検出状況（南東から）



1　伝松下屋敷２次調査 調査溝２（南東から）

2　調査溝２ 東壁土層堆積状況（西から）

3　主要出土遺物

報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松における中世城館の調査（はままつにおけるちゅうせいじょうかんのちょうさ）
編著者名	和田 達也
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466　FAX（053）457-2563
発行年月日	2016 年 3 月 18 日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
浜松城跡（はままつじょうあと）（引馬城跡（ひくまじょうあと））	静岡県浜松市中区元城町	22131	01-04-13	34 度 47 分 30 秒	137 度 45 分 15 秒	2014 年 8 月 5 日 ～ 2014 年 8 月 22 日	17 ㎡	遺跡の活用に関わる情報を得るため
伝松下屋敷（でんまつしたやしき）	静岡県浜松市南区頭陀寺町	22134	05-05-92	34 度 81 分 44 秒	137 度 54 分 84 秒	2015 年 9 月 7 日 ～ 2015 年 9 月 18 日	10 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡（引馬城跡）	城跡	古墳時代 中世 近世	小穴 土塁 窪地状地形	須恵器 中世陶器 貿易陶磁器 土師質土器 陶器	
伝松下屋敷	城跡	奈良時代 中世 近世	土塁 堀跡	須恵器 中世陶器 土師質土器 陶器	

要約

浜松城跡は、浜松市中区元城町にある城郭で天守台や石垣を有する平山城である。11 次調査地点は浜松城に先立ち整備された引馬城の推定地である。16 世紀代のかわらけや陶器が出土した。また土塁が良好な状態で残存していることが明らかになった。

伝松下屋敷は、浜松市南区頭陀寺町に所在する中・近世の屋敷地推定地である。屋敷地西端の土塁と堀跡が良好な状態で残存していることが明らかになった。

戦国時代を代表する浜松の中世城館に関わる情報が現地に良好な状態で埋もれていることが明らかになった。

浜松における中世城館の調査

2016 年 3 月 18 日

編集・発行機関　浜松市教育委員会
（浜松市市民部文化財課が補助執行）
印　　刷　　松本印刷 株式会社

Medieval Castle Remain in Hamamatsu

excavation report

Hamamatsu Castle 11th excavation（Hikuma Castle）
and
Matsushita-yashiki 2nd excavation

A Report of Archaeological Inverstigation
on 15-16th Century Castle Remain in Western Shizuoka Prefecture,Japan

March 2016

Hamamatsu Municipal Board of Education